

504
75

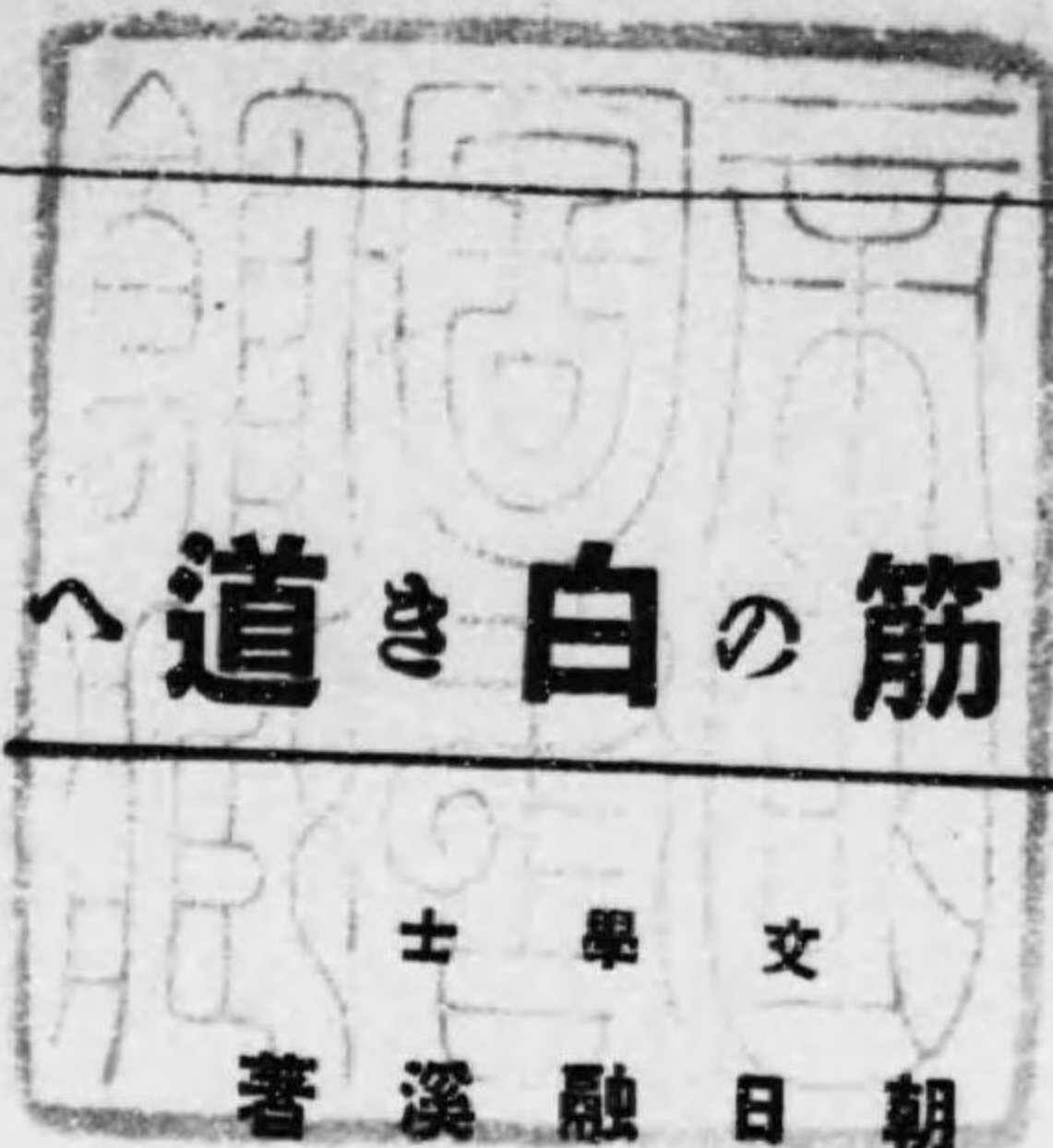


9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹ 1 2 3 4 5

始



504-75



第一筋の白き道へ

文藝學士

朝日融溪著

東京神田

大田館藏版



大正

11. 9. 6

内交

序

唐の善導大師は、その著「觀經疏散善義」の中に、有名なる二河白道の譬喩を設け、真宗教の眞の體驗者としての大師が、その信仰生活の内容を、諸有方面から、周到に徹底的に叙述して居らるゝ。その譬喩の中心生命は、言ふまでもなく、水火二河の中間を走る一筋の白道であり、この白道の合法的精神は、「衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心」の十有五字に説き顯はされて居る。

爾に、この十有五字の金文に關し、親鸞聖人は、その名著「教行信證」信の卷に、「能生清淨願往生心」と言ふは、金剛の眞實心を獲得する事である、これが即ち如來久遠の大意念力より賜りつた大信心であるから、如何なる事情の下にも破壊せらるべきものではない。故にこの信仰を金剛

に喩ふるのである」とあつて願力回向の信心であることを尅明に示されてある。で、清淨眞實の願往生心は、吾等自らの發するところではなく、能くこれを發生せしむる主體は、如來の願力であり、如來久遠の意念力である。故に願往生心は、全然與へられたもの、如來より惠まれたものであることになる。さればこそ、信の卷には、生の字に「セシム」の訓點が施されてあるのである。

此くして如來より與へられ惠まれたる願往生心は、名の示すが如く往生を願するの心である。この信仰心理の中核に、往生の二字が、尅明に鑄りつけられて居る。往生が信仰の主體であり、實質であることが、何等疑ふべき餘地のない様に教へられて居る。實に、善導、法然、親鸞と相承くるところの信仰の中核は、この往生の二字に在て存するのである。往生の信樂を取除いた淨土門は、少くも、彼の善導、法然、親鸞の三聖

に在りては、何等の價値をも存しないものであらねばならぬ。この立場から、現代宗教を批判したならば、何んな結果が顯はるゝであらふか。次ぎには、この金剛の如き往生の大信仰が、衆生貪瞋煩惱中に生ずるとある。所謂貪瞋煩惱とは何であるか。これが吾等の切に聞かむと欲する要義である。貪と言ひ、瞋と言ふ、所謂信仰生活の上にも、猛烈に襲ひ來るべき水火の二河は、言ふまでもなく、順境と逆境とに對する貪愛と瞋恚とを象徴したものであり、これを中心としたる煩惱無盡の生活が、信仰の白道にその一步を入れてより、次第にその濕燒染汚の甚しきを自覺し得るのである。——勿論、白道に足を容るゝ以前にも、臚げなから凝視められないではないが、——爾にも拘らず、これ等の貪瞋煩惱にもさへられず、眞要鈔に所謂「三毒の煩惱しばく」をこり、顛倒の妄念のねに絶えざれども、眞實の信仰はかれらにも碍へられず、未來の惡報

を招かざる、鴻益を被るるのである。貪瞋煩惱ありながらも、唯不思議の願力によつてのみお救にあづかるべきことを教へられたのである。先徳の教語にも、**雙袖**は焼け、**雙袖**は濡れても、安養淨土へ參るぞ、と諭へたまふとある。これが當面の語意である。この當面の教意の外にかゝはつたことの有るべき筈がない。

爾に此に、この貪瞋煩惱中の語意を、時に「人間性の肯定」と解し、特にこれを唱導するものがあつたとしたなら何ふであらう。人間性。假りにこの語を、**Divinity** に對する **Humanity** の肯定と見たならば何ふあらう。

人間の淺猿しさ、人間味の悲哀がシミと痛感せらるればこそ、幸に偉大なる救濟の自覺即ちかゝる大信心が惠まれるとも味はれ、また、かゝる大信心の惠まれたればこそ、この信心の光明に照されて、貪瞋煩

惱の闇い影が、現實自我の上に凝視められるとも味はるゝが、何れにしても、所謂「人間性」——予は人間性即ち貪瞋煩惱即ち **Brutality** と解するに躊躇しない。よしまた **Brutality** が **Divinity** を内在したものを人間性と解する場合ありとするも——を特に肯定する理由が、何ふしても、此文の中からは見出されなと思ふが何ふであらうか。貪瞋煩惱の水が、絶えず濕燒染汚して止まないにつけて、益慚愧の頭を俛だれつゝ、大悲の願力を仰謝し、如來の慈攝を力強く感激する下から、あるが儘なる人間性を愧ぢ畏れ、深き懺悔を禁じ得ないのであるまいか。何處に特に、人間性の肯定を取り立て、力説するほどの肯定そのものが見出されるのであるか。私には何ふも解りかねる。惠まれてこそ、怒るされる。怒るされてのち惠まれるのではない。親鸞聖人の聖教に接して居る人で、あるがまゝなる人間性の恕しと言ふ様のが信仰の

主質であるとは何人が言ひ得よふか。

友人、朝日學士は、嚮日、吾等求道者の爲めに、「一筋の白き道へ」と言ふ一書を著はされ、偶予に一章の序を徵せらるゝの光榮を辱ふした。予、固辭すれども許されず。且つ、鈔梓既に効を卒へ、その内容を一覽するの餘日もなく、熟慮構文の餘裕もない。乃ち、所謂「一筋の白き道へ」と名けられたる題目を便りに、平生感ずるところの一端を記して、一は序に更へ以て著者爲法の勞を謝し、一は所懷を述べて自から信樂の縁に擬せむとするものである。希くは順逆共にこの書を縁とし、今生より未來際を盡し、廣く十方の諸兄弟姉と共に相携へて等しくこの一筋の白道を頼み、速かに彼岸に度せんことを。切に深念して止まないものである。

大正十一年五月廿五日の夜

島地 大等識す

序

人生の行路に立つて、右せんか、左せんかと、往々思慮判断に苦しむ場合が少くない。しかし、此場合は、よし苦しくとも、撰擇の自由か許されてあるだけ、それ丈吾々に餘裕が與へられてある。然るに、吾人の一世には、その撰擇の自由すら與へられないときが來る。此場合には、如何に悶へても、悲んでも、鐵粉の磁鐵に引かるゝ如く、我が身の宿業にひかされて、行くべき所に赴かなくてはならぬ。此時の苦悶ほど、眞實な苦悶はあるまい。

自分と云ふものを客觀的に眺め、死と云ふ問題を、人の問題としての間は、到底かゝる惱みを想像することだに出來ない。しかし、一度、客觀を轉して主觀となし、他人の問題を、自己の問題として取扱ふ様にな

ると、我身の罪業の淺間敷さに驚き、宿業の所感にこののきを禁ずるを得ない。而して我身の行くべき前途をありありと見せつけられたとき、とうてい、じつとしてほられない筈である。親鸞聖人は之れが爲めに悶へられた。九歳の年の出家より、廿九歳の離山に至るまで、二十年の研鑽苦學、畢竟此問題の解決に過ぎなかつた。而して最後に法然上人の導きによつて、徹底的に解決を得られた。

「親鸞に於ては只念佛して彌陀に助けられ參らすべしとよき人の仰せをかふむりて信する外に別の仔細なきなり」(歎異鈔第二章)とは、乃ち聖人の體驗の叫びである。かのソクラテースの賢明なる所以は、其無智なることを、自覺せる點にあるが、親鸞聖人の偉大なる處は、愚者の體驗に徹せられた點にある。法然上人は、

「念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくく學すとも、一文不知の

愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じうして、智者の振舞をせずして、唯一向に念佛すべし」(一枚起請文拔萃)と教へられた。上人は知者であり、學者であり、又徳者であつた。聖道門にふさわしいほどの聖者であつた。故に捨つべき多くの物を持たられてゐた。親鸞聖人には、學者の自覺も、徳者の自信も更になかつた。捨つべき何物をも所持せられなかつた、無智のともがらに同じうするのではなく、全く懸値のない無智のともがらとして、念佛せられた。さればこそ

「何れの行も及び難き身なれば地獄は一定すみかぞかし」

と思ひきつて、本願一實の大道に歸入せられたのである。この點が聖人の偉大なる點であり、淨土眞宗が時代相應の宗教である所以である。本書「一筋の白き道へ」は乃ち此一實の大道を宣明せんが爲めの道

友朝日文學士が苦心の著である。同時に本書は君が信念の披瀝とも見ることが出来る。眞實自己に目醒んとするもの、又如來の救済に生さんとするものに、本書の一讀を慇懃して止まないものである。

大正十一年六月

泉道雄識す

自序

一 昨年の春なほ淺い頃のことであつた。猖獗を極めた流行性感冒の虜となつて、日夜四十度前後の高熱に身を焼かれつゝ、褥中に呻吟せねばならなかつた。人も自分をこの世のものではないと眉をひそめ、私自身も再び健康に復るべき見込を有たなかつた。

じつと觀念の眼を閉ぢて、眠むられぬ夜もすがらと、熱に焼かるゝ苦しきと言つたら、殆んど形容するに語を知らぬものであつた。被をしめた臑ろの電光の下に身動きもならず仰臥して、苦しくとも動けぬ身は、額から腋下から、背筋から、膏汗がじり／＼とにじんて出る。晝間は稍まぎれる病苦も、夜中はまぎらはすに人もなく、物もない。長い看護に疲れてゐる家族や、看護婦が、咳せきだも發せぬ眞夜中に至つては、あながち

に病苦のみではない。ひし／＼と身邊に迫つて来る淋しさの手は、身を絞めく／＼られるやうである。而して、その時間の長いこと、實に言語に絶してゐる。心のみは悶々としても、體は自由を許さぬ。苦しむ時、悶ゆる時、褥中に轉々し得るならば、まだよい。苦しんでも、悶えても、形はじつと動くを得ず、足をちぢめたまゝ、頭を枕に埋めたまゝ、そつと苦悶を包んでゐること位、堪えられぬことはない。一分間も、一時間の如く、一時間も、一夜の如く、一夜も果知らぬ永劫の時の如くである。

あゝ何等動搖も感ぜず、しかしながら絶えず暗の底に沈んで行くが如き、苦しさよ、淋しさよ、それを夜毎に味つて行くことは全く言語に絶したことである。

時計の針などで計り得ぬこの夜が除かれて、靜かに自分に注意しつゝ、家族の者が雨戸を繰る時、私は蘇生以上の蘇生、更生以上の更生を感

ずるのである。雨戸の音に、閉ぢてをつた眼をそつと見開く、朝の日の光が、否、慈光が、何とも言へぬ親しみを以て室内に流れ入るのである。健康時には、射るやうに、投ずるやうに入つて来るその光の速度が、この時は苦痛の觸感の上に靜かに撫でるやうに感じて流れて来るのである。私はたゞあつと叫ぶ外に何も言ひ得ぬ。膏汗があともなく消える。この時の喜びであらう。法悦といふのは。苦痛のどん底に沈む私だちが恵まれた一筋の白き道に歩むことを得るみ佛の攝理を知らせて戴いた刹那の悦は、正にこれであると思つた。

夜を泣きあかしたものでなければ、朝のこの喜びを感謝しつゝ受け容るゝことは出来ぬ。

眞實に、人間や、自然に對して、懐しむ心、いたはる心を抱き得るのは、最も深い人生の暗さとはかなさとを知りぬいたものでなければ出来ぬ

ことであらう。

眼を閉ぢてじつと當時を思ふと、今は當時の病苦は忘れられてしまつて、朝な／＼のその時のこの悦がありありと心の中に蘇つて來るのである。

大正十一年五月

四谷の橋居にて

著 者 し る す

一筋の白き道へ

目 次

一、一筋の白き道へ

- (一) 流轉の魂…………… 一頁
- (二) たゞ一筋の白き道へ…………… 二三頁
- (三) 無碍の大道…………… 四四頁

二、遇うて空しく過ぐるものなし

- (一) 人と生れしことの喜び…………… 七一頁
- (二) 本願力…………… 八九頁

(三) 遇無空過者……………一〇八頁

一六

三、日月清明

(一) 自然のいのち……………一四二頁

(二) 環境に導かれて……………一五〇頁

(三) 漲れる慈光に浴して……………一六二頁

— 畢 —

一筋の白き道へ

文學士 朝日融溪 著



一、一筋の白き道へ

(一) 流轉之魂

地上に生存してゐる私だち人間には、色々様々の束縛や、制限や約束がある。而して、私だち人間は、その制約を守らねばならぬと思ふ心の反面には、自由に飛躍し得る社會のあらんことを望んでゐる。かくて私だちはその制約の範圍から一步でも出ること許され

(一) 流轉之魂

一

ぬとなると實に堪へられない苦痛を感じるのである。自由を翹望してゐる人間が、制約の爲めに屈せねばならぬところに、人間の苦痛が存する。而してこの苦痛を感じる所に人間の生命があるのである。尊さがあるのである。即ちこの苦痛をしみじみと感じるといふのは、人間の生命の中心に希望と理想の追求とが燃焼してゐるのである。希望のない人間は、如何に物質的の方面に自由を有してゐても、それは人間としての生活には無意味であらう。それは死と同様であるといふても差支えはないであらう。而して希望は、其の本質として無限でなくてはならない。理想は永久に向上し、無限に發展する所にその價值を存してをる。然るに現實に生きて行く私だちは常に幾多の制約の爲めに束縛せられてゐる。無限の希望。永久的向上の理想に對して、その住む世界は全く有限である。こゝに人間の深き悩みが

發するのである。この苦惱が私だちを驅つて、自己の小さな生命を打ち破つて、無限悠久な生命を求めようとする要求が起つて來る。厭離穢土、欣求淨土の願生安樂國の信仰の中心が發して來る。

理論や、筋道はどうでもよい、眞に現下の自己に希望があるか。又理想があるかと考へて見る。なるほど高大な希望がある。なるほど深遠な理想が存する。しかし、その希望、その理想は、現下の自己とはあまりにかけ離れてゐるのに驚くであらう。言葉を換へて言へば、其の深遠な理想、高大な希望に對して、餘りに自己は、無智であり、無價值であり、無力であることに驚くであらう。深夜人さだまつて後、目覺めた己れの魂が、靜かに御佛の前に額づく時、小さな無力な、無智な、而して無價値な自己にあきれないものが何人あるであらうか。深遠な理想、高大な希望には何の關係もないと思

はれるほど、その理想とその希望とにかけ離れたる自己であることに氣付くであらう。

さうは氣付きながらも、而も吾人は未だこの小さな現實に生きて行きたい。否生きて行かねばならぬ。しかしこの生きたい、生きて行かねばならぬといふ意味を凝視して見ると、そこには自己と他との關係によつてあることが解るであらう。他を目標として己の生活を伸ばして行かうとすれば、そこに競争を起す。競争には羨望、猜忌、呪咀、憎惡、陥穽等の恐ろしい葛藤がつきものである。心は何日もく、これ等から起こる不安の爲めに苦しまなければならぬ。世間的に成功した人でさへそれであるから、失敗し、失望した人も亦同じく苦しみつゝ生きて行かねばならないことを思ふ。而してそれ等の人々は他との關係を離れても生きて行かなくてはなら

ぬことに氣付く。眞剣な自己批判はこゝに根ざして起つて來るのである。失敗し、失望し、他に捨てられて、全く他との關係を離れて生きて行かなくてはならない時は、眞實の自己を見つめる時である。赤裸々な、醜惡な、自己を正面から見つめるのはこの時である。

己れと他との關係即ち相對的關係を圓滑ならしめる爲めには、そこに法律や、道德が成立つてゐる。自己一個の存在の爲めには、それ等の相對的な制度や、掟は、更に役には立たない、全く無價値なものである。自己一個の存在とは自れの魂の存在である。何ものにも制限されずに自由に解放せられるものは己れの魂である。魂は實に自由なる一個の存在である。獨生、獨死、獨去、獨來である。かく見來たり、觀じ來たる時、自由とは美しい、而して尊嚴な言葉であり、文字である。が、其の眞の意味は、深く強く鋭く味ふて見ると、

堪へられない淋しい意味を含んだ語であることに氣付くであらう。即ち、何の力もない己れの魂が、何處に、或は何處へ獨生、獨死、獨去、獨來しようとするのであらうかを究めねばならない。

當行至趣、苦樂之地、身自當之、無有代者、善惡變化、殃福異處、宿豫嚴待、當獨趣入、遠到他所、莫能見者、善惡自然、追行所生、窈々冥々、別離久長、道路不同、會見無期、是難是難、復得相値、と「無量壽經」の下卷の三毒段にある。是れを聖典には

行くに當りて苦樂の地に至趣す、身自ら之に當る、代る者有ること無し、善惡變化し殃福處を異にす、宿豫嚴待して當に獨趣入すべし。遠く他所に到りぬれば能く見る者莫し、善惡自然に行を追ひて生ずる所、窈々冥々として別離久長なり、道路同じからずして會ひ見ること期無し、甚だ難く甚だ難し、復相値ふことを得ん

や。

と和譯してある。是れを更に、

死後の趣く所は一生の行業の果報によるもので、惡業の者は苦しい所に趣き、善業の者は楽しい境界に生れるものである。自分の行業の責任は、必ず自分が負ふので、決して、何人も代つて其の果報を受くるものはない。此世で善い行を勉めるは苦に似て居るけれども、後には變じて樂となり幸福に生れ、惡を爲すは樂に似て居ても、後には變じて苦となり禍殃の處に生れるのである。果報は前以て先方から嚴然と定められ待ち構へられて居るので、即ち自分が行く可き處と定められてある處へ獨り行くのである。斯くて遠く他處に到つてしまへば、親子夫婦の間でさへも、行先は更に分らぬのである。善惡の應報は自然であつて、行業に因つ

て、それ相應の生を受くること、人の力で如何ともすることが出来ぬ。斯くて行先は窈々として遠く、たどる路は冥々として闇く、永劫に相別離し、死出の山路は一生の行ひの異なりし如く同じからず、復び相見るの期なく、また相値ふことを得ぬのである。

と伊藤精次氏の「口譯淨土三部經」には記してある。

考へなくてはならない。己れの今日までの過ぎ來し方を觀みなくてはならない。果して魂は自由である。自由なる魂を抱ける己れなるが故に、魂の自由なりしことを悔いねばならぬ。しかし、悔いても及ばぬ。己れの蒔いた種の結果は己れが蒔らねばならない。「とても地獄は一定すみかぞかし」と親鸞聖人は仰せられてをる。自分の蒔いた罪、その結果は何であらう。とても地獄は我が住家でなくてはなるまい。眞實な自己に氣付いた時、とても地獄は一定住家である

ことに氣付かねばならぬ。恐ろしいことだが、自分の蒔いた結果を自分で蒔らねばならぬ。しかし、何れの行も及び難き身なれば、地獄は一定住家である。それを、聖人のこの仰せを眞に理解もせず、何れの行も及び難きか、否かをも思はず、いさゝかの内省もなく、自己の何者なるかもつきつめずして「私は地獄行で御座います」と、それが功^{てが}でももあるやうに濟まし込んでをる。これほど恐ろしい冒瀆があらうか。それは邪見であらう、驕慢であらう。己れの魂の行先きをすら虚偽と虚飾に包んで、己れで作り、捏ね上げた信仰といふ概念の下に蔽ひ隠さうとしてをるのである。然れども正直で眞劍な魂は外部との接觸を斷つて、何者にも係りのない境地にさらけ出される、偽といふ色系で幾重にも捲かれた複雑な經緯を突き破つて、眞個の姿を表して來る。漸くかうであらうと作り上げた信仰といふ

ものを其の足下に踏みにじつて、切ない淋しさに泣くのである。この切ない淋しさに泣く魂は、己れ一個の魂の存在の事實に氣付いて、久遠劫よりこの方流轉し輪廻して止むことなき流浪の淋しさに泣くのである。

己れの不満足に泣く魂や、他に對して泣く魂は、己れの眞個の魂の嘆きではなくして、己れの欲するものを得られざる不満の淋しさか、他に虐げられて、之に反抗するの力なきを悲しむ爲の淋しさである。この淋しさを補はんが爲めに信仰が欲しい。かくして求めんとする信仰は實に利己的な不純なものである。金が欲しい、大儲をしたいが故に豊川、稻荷にも、淺草の觀音様にも願をかける。太平洋を横斷せねばならぬ、難船せぬやうにと金比羅さんや、増上寺からお守を頂く。己れの不攝生から眼を病ふ、さうしてこの病ひを癒し

て下さいと不動様に祈を捧げる。是等は皆己の煩惱慾の満足が、其の時々の信仰の目標であり、對照である。對外的關係によつて生じた魂の孤獨の淋しさから求めんとする信仰は、煩惱慾を満たさんが爲めの目的に外ならぬ。

淋しい悲しい己れは全く孤獨である。夕闇に迫られた曠野に捨てられたやうに淋しい。廣漠たる沙漠の上をあてどもなく彷徨ひゆく流浪人のやうに悲しく、便りなく、切ない。こゝに信仰を求めんとする心が起こる。お救ひを仰がんとする心が起こる。このやうな信仰、このやうなお救ひがこの世にあるとするならば、淋しい心を賑やかにするものが信仰であり、進む可き目標を定めるのがお救ひである。これ等は少なくとも斯様にありたいと利己的な己れの魂が願ふのである。願ふところに既に結果を豫想してをる。それでは失望

に終ることとは間違ひのないことである。眞劍のやうになつて求めた信仰も、お救ひも、其の實己れが樂に生きたい、平和に暮したいといふ自身の煩惱慾を満たさせようとするおほそれた考の中に形造つた偶像に過ぎないことに眼覺めねばならぬ。こゝをよく突き込んで考へて見ると、悲しさから、又淋しさから逃れ出よう、しかも逃れ出るにしても容易に他人の追隨し得ない或る力によつて逃れようといふ慾望の變形であることを確めねばならぬ。

こゝに彷徨な己れであるが故に、信仰を戴いたやうな積りになつて、如來様といふ美名の下に隠れて、愚にもつかぬ觀念遊戲に耽らうとするのである。悪人正機は如來様の誓願だと嘯き。懈怠勝ちなのは凡夫の當然であると納り返らうとするのである。己れでなした一切の行爲即ち業の結果を忘れて、其の責任を廻避しようとする卑怯な振舞だとさへ氣が付かないのである。これも言葉を換へて言へば、己れ一切の責任、自らの一切の重荷を如來様に脊負はせて、己れは知らん顔をして済まし込んで樂をしようといふおそろしい我儘な願ひなのである。口にはお慈悲だ、恩寵だ、だゞのお救ひだなどと言ひながら、このお慈悲を、この恩寵を、このお救ひを枕にし、喰ひものにして、己れを樂にぐうぐう寝込まうとする横着な考へなのである。叱る人はこはい。叱らない人の前へ行つて勝手なことをしようといふのなら、そこに信仰も何もあつたものではない。何事をなしても、何ものをなしても、少しの叱責もなく、而かも温い情で包んで呉れるものであつたなら、私だちは一層、自己の行爲を耻じて、その恩寵に報いる慎みと努力とを加へなければならぬ筈である。否な加へずにはおられない筈である。その慎み、その努力こ

そは、吾々の信仰生活の第一歩であらねばならぬ。

大無量壽經の下卷五惡段に

大命將終、悔懼交至、不豫修善、臨窮方悔、悔之於後、將何及乎、天地之間、五道分明、恢廓窈窈、浩浩茫茫、善惡報應、禍福相承、身自當之、無誰代者、數之自然。

と。是を聖典には

大命將に終らんとして悔懼交至る、豫め善を修せず、窮るに臨みて方に悔ゆ、之を後に悔ゆとも將何ぞ及ばんや。天地の間に五道分明なり、恢廓窈窈、浩浩茫茫として善惡報應し禍福相承く。身自から之に當る、誰も代る者無し、數の自然にして其の所行に應ず。

と。伊藤氏は更に是れを口譯して、

大命將に終らんとする時になつて、初めて心の中に悔と懼とが交々起つて來るのである。しかし豫て善を修せずにあつて、命終らんとする時になつて、如何に悔いても、最早や及ぶものでないではないか。天地の間に五道を浮きつ沈みつ輪廻する有様は火を見るよりも明に分つて居るのである。其の道は實に浩浩として廣大に、茫々として深遠であつて、善を修すれば必ず福報を受け、惡を爲せば必ず禍報を受け、自分の業の報は自分が受けねばならぬので、何人も代ることは出來ぬ。其れが數の自然である。

と。胡麻化さうとして胡麻化すことの出來ぬ因果律の大道の上を、自由に右往左往してをるのが我が魂なのである。掛値の多い偽善を善と心得てをる始末におへぬ己れも、この大法に照らされては、奈落の底に落ち行く外には途のない己れの魂に目覺ねばならぬ。ある

様なふりをした現在の己れには、救はれて行く確信も喜びも毛頭ないのが事實である。其の事實の底に立脚して、静かに落付いて、外面的な事を一切抜きにして、疑はうとしても疑ふことの出来ない現在に於ける己れ自身の事實を見つめねばならぬ。この事實を土臺として己れの魂の行く先きを考へなくてはならぬ。徒に鼻の如く、眼を圓くして、四方に怯えたり、蛙のやうに空ばかり眺めては居られない。何ものよりも先きに己れの脚下を見詰めねばならぬ。かうする事が現在の己れにとつて、自れの魂に對する最も忠實な道であらねばならぬ。魂にかけてあるあらゆるペールを取りはずして、魂を圍んでをる一切の虚偽を打ち破つて、ありのままの己れを打出さねばならぬ。念珠爪ぐる殊勝者振りをやめねばならぬ。ありがたげに求道者ぶる假面を脱がねばならぬ。而して裸一貫の人間に立ち返ら

ねばならぬ。

私だちの目下の魂の叫びはかうである。

「何んとなく不安である。何ものかにたよりたい」

「お救ひ下さる如來様のお慈悲に徹したい、浄土往生は願はしい、が、其の實お浄土に參るよりも、何時までもこの世に生きてゐたいのが眞實である。然し、すべての人は死んで行く。己れも亦人として生れ出たのである以上。どうせ一度は死なねばならぬ。死なねばならぬとすれば、今の中地獄へ落ちぬやうお浄土へ參る用意をしておかうか」

と。いふやうなものである。

かやうな生温るい、横着な、人を喰つたやうな求道が何んにならう。

己れの魂のこのおそろしい叫びを聴いて、あつと驚かざるを得ぬ。其の魂を一握りに握り潰したい氣がする。然し、これは己れの眞實の魂の聲である。こゝにこの魂を有する己れの病根があるのであらう。これが人間として生まれ出た己れの悩みであらう。親鸞聖人は「教行信證」の信の巻に

悲しい哉、愚禿鸞。愛欲の廣海に沈没し。名利の大山に迷惑して、定聚之數に入ることを喜ばず。眞證之證に近づくことを快しきせず。耻づべし。傷むべし矣

との、悲壯な、而かも、大膽な告白を記してをられる。人として生まれ出られた親鸞聖人の御惱みもこゝにあつたことを氣付かして戴く、こゝに己れの魂も救はれるべきかすかな光明を認めるのである。蓮如上人はこの事を一層露骨に私どもの魂に同情されて、次の様

にその書簡集に言うてをられる。即ち、法然上人が、淨土を願ふ行人は、病患を得て、ひとへに之を樂しむと申されたのを、蓮如上人は老年になつて病氣にお罹りになつた時、この聖人の言葉をひいて、しかれども、あながちに病患をよろこぶこゝろ、さらにもつておこらず。あさましき身なり。はづべし。かなしむべきものか。

と。私たちの魂を刳るが如きまでに痛々しい上人自身の衷心をさらげ出されたこの事實に照されては、隠れて、ひそんでゐる己れが魂も、現在の事實の上に投出されねばならないのである。この魂を抱きながら、歎異抄の第九章、即ち

「念佛まをし候へども踊躍歡喜の心疎に候ふこと、またいそぎ淨土へ参りたき心の候はぬは、如何にと候ふべきことにて候ふやらん」と申し入れて候ひしかば「親鸞もこの不審ありつるに、唯圓房おな

じ心にてありけり。よく／＼案じみれば、天に躍り地に踊るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにて、いよく／＼「往生は一定」と思ひたまふべきなり。しかるに佛かねて知ろしめして「煩惱具足の凡夫」と仰せられたることなれば、他力の悲願は此の如きのわれらがためなり」と知られて、いよく／＼頼しくおぼゆるなり。また浄土へいそぎ参りたき心の無くて、いさゝか所勞のこともあれば「死なんずるやらん」と心細くおぼゆることも煩惱の所爲なり。久遠劫より今まで流轉せる苦惱の舊里は棄て難く、未だ生れざる安養の浄土は戀しからず候ふこと、まことによく／＼煩惱の興盛に候ふにこそ。名殘惜しく思へども、娑婆の縁盡きて、力無くして終るときに、彼の土へは参るべきなり。いそぎ参りたき心無き者をことに憫みたまふなり。これにつけてこそいよく／＼大悲大願は頼しく、往生は決定

と存じ候へ。踊躍歡喜の心もあり、いそぎ浄土へも参りたく候はんには「煩惱の無きやらん」とあやしく候ひなまし」と云々。

と。書かれてあるお言葉を、一切の關係を絶つた魂其のもの一個で、よくかみしめて味つて見ると、一語は一語より切實に、一行は一行より痛切に、一皮づゝを剥き取られて、ぼんやりした無智の凝結な魂を見出すのである。「久遠劫より今まで流轉せる苦惱の舊里は棄て難く、未だ生まれざる安養の浄土は戀しからず候」とは、何といふ飾り氣のない明かな、しかも生血のぼた／＼滴るやうに痛々しい實際的な言葉であらう。お説教に引かるゝお言葉だとか、お聖教に書かれてをる文句であるといふ感じをぬきにして、何等の理論も、理窟も、假定も、條件も、註釋も、附せず、卒直に靜かに己れの魂にひきよせて考へて見ると、魂のどん底からせき來る己が魂の涙に

洗はれざるを得ないのである。悲しいと言ふ言葉を使用するのにはあまりに己れの五慾の爲めに魂を虐げて来たことに不満を感じ、泣くといふ言葉を用ひるにはあまりに不純で虚偽に満ちたこの己れ、人間として生まれて来ながら人間としての赤裸々な聲を出し得なかつたこの己れも、親鸞聖人や、蓮如上人や、唯圓房達の言葉に照らされて、隠さうとして隠しきれない、胡麻化さうとして胡麻化することの出来ない己れの執着心と、己れの身にも魂にも深く鋭く食込んで切り離さうとしても切り離すことの出来ない人間といふもの、本音とを、まざとくと見せつけられて、人間らしい心地にさしていただくのである。かやうに淺果敢な而も淋しい魂を抱いてをる己れであることに氣付いた己れはどうすることも出来ない悲しい思ひに泣くにも泣かれないのである。

(三) たゞ一筋の白き道へ

執着の強い無智な魂に目覺めて、己れの醜惡な姿を顧みると、無反省に無理解に過ごして来た己れの過去の冒險的な恐ろしい生活の断片が、頭腦の中に閃き過ぎる。而かもそれにすら一種の懐しさを感ずる程、目下の魂は淋しいのである。否、淋しいばかりではない。一種の苦しさをすら加へてをるのである。己れの無智、己れの醜惡に目覺めた魂はかくの如く淋しさにふるへてをる。かくの如く苦しさにあへいてをる。而も、後へ引去ることは最早や目覺めた魂が承知しない、前へ進むことは尙更出来ないのである。かくてどうすることも出来ない現實に泣かねばならぬ。

深心といふは是れ深く信ずるの心なり。亦二種あり。一には決

定して深く自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠却より已來常に没し、常に流轉して、出離の縁あることなし、と信ず、と、善導大師はその散善義にいふてをられる。是れ實に大師自身の魂の目覺めたる記録であらねばならぬ。而もその次には

二には決定して深く彼の阿彌陀佛の四十八願は衆生を攝受し、疑ひなく、慮りなく、彼の願力に乗じて、定て生を得、と信す。と、いふてをられる。

即ち、「常に没し、常に流轉して出離の縁あることなし」と嘆かれて、大師自身の魂の自覺に依つて、こゝに疑ひなく、慮りなく、彼の願力に乗じて、定て往生を得との歡喜の世界が展開せられをるのである。これを以て見れば、實に、絶望そのものは絶望を生む所以ではない。つき詰められたるところは、それが決して最後ではないので

ある。こゝに價値の轉換がなければならぬ。魂の否定は、單なる魂の否定を以て目的とするものではない。其の否定の透徹に根ざして、そこに眞の魂の局面は展開されねばならぬ。かくてこそ、そこに從來のものゝ一切の價値の置換へがある。即ち、論理にいふところの「AはAである」「AはAでないものではない」「Aか或はAでないものか」との三大法則の間に、すべての智識と、一切の科學とを形成し、組織して行く有漏の人間の學問を超越して、唯一の眞實を肯定せざるを得ないのである。この眞實に統合せられて行く世界には「Aは必ずしもAでなく」「Aは必ずしもAでないものではない」「Aでも又Aでないものでもない」ところの或るものが存するのである。さういふ世界があるのである。目覺めたる魂の行くべき世界はこゝでなくてはならない。

然るに、己れの魂には、こゝに行く可き力がない。否、力がないのみでなく、現在及び過去の業報を觀みて、たゞ／＼恐れ戦くのみである。この戦く魂を抱いて、私どもが大師の語を味うたならば、幾度か生死の間を經巡つて罪の上に罪の上塗りばかりをして來た己れの前業の報いによつて、今、悩み苦しむ、而して是を如何ともすることの出來ない己れの魂の事實に當面して、切ない思ひに泣くのである。かゝる己れを、己れでない他人がどうすることも出來ないことは勿論である。他人のどうすることも出來ないのはいふまでもなく當然で、恒河の沙子の如く澤山ある諸佛の力でさへも及ばないほど、それほど己れは極重惡人なのである。であるから、あらゆる賢人も、あらゆる聖者も、諸佛も、又それ等のみ教も、現下の己れにはたゞ泣きつゝ、苦しみつゝ、この淋しい魂を抱きながら、この

苦痛に充ち満ちた人生を獨り淋しく行かねばならないのであらうか。己れは永劫に、この不純な、無智な、執着の強い魂の彷徨ひに委せねばならないのであらうか。己れは、全く救ひといふものゝない無佛の世界に投げ出された孤兒として憂さつらさを忍ばねばならないのであらうか。何の目あてもなく三界を流轉して、浮きつ沈みつ行かねばならぬ流浪の人であらうか。何といふ淋しさであらうか。覺めた魂の淋しさと、遣瀨ない苦しさととは、未だ覺めざる魂が迷ひの中に明滅する果敢ない幻影を追ふことすら戀しく懐しからうとするのである。實にそこには覺めて悔しい夢の思ひがある。もう如何ともすることが出來ないのである。こゝに沈滞しようとする危さがある。自暴自業に終らうとする危さがある。

然るに、善導大師は、「常に没し、常に流轉して出離の縁あること

なし。」と嘆かれた魂に、「彼の願力に乗じて定て往生を得。」と明記されたのである。己れを救うて下さる神も佛もないものかと絶望の淵に身を投げんとする時、吾々はこゝを窮めねばならない。善導大師は、觀經疏の第四卷即散善義に一つの説話を記されてをる。

譬へば、人ありて西に向ひて百千里を行かんる欲するが如き、忽

然として中路に二の河あるを見る。一には是れ火の河南にあり。

二には是れ水の河北にあり。水火の中間に正て一の白道あり。闊さ四五寸許りなるべし。此の道、東岸より西岸に至るに亦長さ百歩。其の水の波浪交々過ぎて道を濕し、其の火焰亦來りて道を燒く。水火相交りて常に休息することなし。

と。流轉極りなき魂の業報によつて、この世に生まれ出でた己れは、力にもならないものを力になると思ひ、當てにもならないものを當

てになると信じ、味方にもならないものを味方になると考へ、ありもせぬ内と外とを區別して、得られもしないものを得ようとし、樂しみでもないものを樂しいものであると考へて、僅かの生命を無限の長さを有する命であると思ひ込んで、人生といふ一つの渦巻の中に、自ら好んで飛び込んで腕いてをるのが、即ち己れである、而して己れの周圍には、親がある、妻がある、子がある、多くの友がある、なほ多くの人々がある。何事かをなさうとして企て行く時は、いつでも己れを中心として考へ、己れに満足を得たる後、子や、妻や、親の利益満足を求めて行く。こゝに貪慾と愛慾とに溺れるのである。而して、友や、他の人々の幸福や、満足な様を見ると瞋恚の熾火に焼かれて、猜み、羨み、呪ひ行くのである。それが吾々の常態で、偶々先哲の教へや、聖者の道を聽いて、人として生まれ出た

己れは、人らしい道を進らねばならぬと氣付かして貰つても、めまぐるしい外部の刺戟と、飽くことなき内心の慾望に打勝たれて、一切の自己を忘れ盡くして、煩惱のなすがまゝに引きづられて行くのが己れの事實である。斯くしても猶、親や、子や、妻や、兄弟や、友達や、社會やを己れの對手にし、使りにして、楽しく平和に暮して行く事が、いつまでも續くものであると考へてゐる。花は何時まで咲いてゐるであらうか。爛漫もたゞ一時である。月は何時まで皎々の光を放つてゐようか。團々たる光輝もたゞ一夜である。人と人との交渉、愉快、それもたゞ瞬く間のことである。親は死ぬ、子が夭する、妻が先だつ、友が逝く、社會は變轉し、平和は目前に攪亂されて行く。賑やかな浮々した面白い楽しいと思つてゐた世界は、悲哀と轉變と無情との荒涼たる野らと變ずる。この野ら、この

世界の、この實相に投げ出されると、今まで楽しかつたと思ふた、懐しかつたと思ふた、兄弟も、友も、子も、妻も、親も、かうした外的なもの、一切が破壊し盡くされて、何の便りにも、助けにも、力にもならずして、己れ一個の眞の孤獨に目覺めて、驚き戦きつゝ、己れの内部に逃込んで、己れの魂を見つめるのである。しかしながら、いくら見つめて見ても、探つて見ても、無價値な無智な魂に何の力があらう。何の光があらう。今や絶體絶命である。茲に至つては、今まで老人の爲めのお話であるときけなしてゐたお説教も、眞劍になつた積りで聽いて見る。いろ／＼な書籍の頁を繰つて見る。さうして、己れの魂の淋しさと切なさにと引きあてゝ、お助けの道理はかうであらうと筋道をつけておく。お救ひ下さる如來様は、かういふ具合な如來様であらうと己れの都合のよい如來様を作つておく。

しかし、これ等の事は一つ時凌ぎの氣安めにはなるであらうが、今一層深刻な、魂の孤獨の淋しさに逢著するならば、解つた筈のお助の道理も、拜み得たる筈の如來様も、皆消え失せて、何の力も何の光も與へて呉れない空しい概念であつたことに泣かねばならない。作ることが煩惱なら壞すことも煩惱である。貪愛瞋恚の水火に取圍まれて、身動きのならぬ凡人の魂の現實は、何處まで行つても解くことの出来ない謎の循環である。

大師は又次の如く記されてをる。

此の人既に空曠の迥なる處に至るに更に人物なし。多くの群賊惡獸ありて、此の人の單獨なるを見て競ひ來つて殺さんと欲す。此の人死を怖れて直ちに走りて西に向ふに、忽然として此の大河を見る。自ら念言すらく、此の河は南北邊畔を見ず。中間に一の白

道を見れども極めて是れ狭小なり。二の岸相去る事近しと雖も何によつてか行くべき。今日定めて死せんこと疑はず。正に到り廻らんと欲すれば、群賊惡獸漸々に來逼せん。正しく南北に避走せんと欲すれば、惡獸毒虫競ひ來て我れに向ふ。正しく西に向つて道を尋ねて去らんと欲すれば、復恐くの此の水火の二河に墮せんことを。當時の惶怖復た言ふべからず。即ち自ら思念すらく。我れ今廻るとも亦死なん。去るとも亦死なん。一種として死を勉れずば、我れ寧ろ此の道を尋ねて前に向つて去がん。既に此の道あり、必ず度るべし。

と。この旅人はとぼくと何物をか求めつゝ、人もなき空曠の沙漠歩んでゐるのである。旅人とは別人ではない。己れ自らである。人に對する己れの不實を言はずして、人の己れに對する不實に忿り、

己れの人に對する無殘の所爲を棚に上げて、人の己れに對する無慈悲を恨み、己れの貪慾を隠して、他の貪慾を嘲り、己れの不運不幸は他の所爲によつてなされたものではなく、己れ自身の業報の結果なることを知らずして、他人の所爲だとなして之を怨み、己れにそれを回復するの力なきことを嘆かずして、世を咀うてゐる。貪慾瞋恚の燃ゆる焰火に狂うて、何物をも信せず、亦信することの出来ない悲痛のどん底に沈んで、惱みながら、一切の外界との關係を斷つて、己れのなし來つた一切の業を顧みると、己れのなし來つたすべての行爲の中には一つの正しきことをも見出し得ないのである。正しいと思ふたことも、その實、己れを中心とした打算からのことであつて、それを無理やりに押通した結果は、どのくらゐ他を傷けたことか知れないのである。

己れの魂は眞劍にならうとしてゐる。魂は魂としての價値に目覺めようとしてゐる。こゝに學び得たる人倫、道德、法律、哲學が嚴しい鞭をあてようとしてゐる。自責の苦痛に堪へない。苦痛はどこまでも苦痛を生ずるのみである。よく其の苦痛に忍び耐ふることが出來ずして、方向をかへてこの苦痛を脱れようとする。「忽然として此の大河を見たのは此の時である。耐へ難き苦痛の管下に泣かねばならぬ結果の生すべき業因を作つたことが己れの魂であることを忘れて方向さへ轉すれば、その苦痛を迴避し得ると考へた魂もその魂であることに氣付いたのである。如何に姿を變へ、形を變へて、自己の魂の中に獨居して、其の中に於てだけでも、自由の天地を發見しようと思ふて見ても、其の根本の魂の中の内容が變らざる限り、そこには更に恐る可き貪慾と愛慾の渦卷が生じてをり、瞋恚の焰が

盛にあふれてをる。「當時の惶怖復た言ふ可からず。」との大師の悲愴なる叫びは、己れの魂の悲痛なる嘆きである。外に走らんとすれば苦痛に堪へず、内に隠れんとすれば淺ましい嘆きを繰返さねばならない。「我れ今廻るとも亦死なん。去るとも亦死なん。一種として死を免れず。」死に面して今や何事をなすの方法もない。この苦を免るゝことを死の如く考へて死するとするならば、業報を果たさずして死することの無意味を思はなくてはならない。當然これは受くべき苦しみである。正に受け果たさなければならぬ自業自得の苦しみである。浪の中に渦巻かるゝまゝに、焔火に焼かるゝがまゝに委さなくてはならない己れの現實である。この現實に立ちながら、一筋の白道を見る。己れが立つこの現實の苦惱に悶えつゝ、この興えられたる白道に歩を進めんとすることは、現下の己れに取つては唯一

の方途である。其の道が何れに續くかは彌陀の招喚と釋迦の發遣との教命によつて的示されてをる。議論しよとするが如きそんな餘裕とではないのである。そんな生やさしい苦惱に煩えてゐるのではないのである。遊戲ではない。正に眞剣なのである。

親鸞聖人のお物語の趣きとして、歎異抄の第二章に於て、

親鸞におきては「たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし」と、よき人の仰せを被りて、信するほかに別の仔細なきなり。念佛はまことに淨土に生るゝたねにてやはんべらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人に賺されまゐらせて、念佛して地獄に墮ちたりとも、更に後悔すべからず候。その故は自餘の行を勵みても佛になるべかりける身が念佛を申して地獄にも墮ちて候はばこそ賺されたてまつり

て」といふ後悔も候はめ、いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

と申されてをりますが、親鸞聖人が如何なる場合に、如何にしてかくまでに徹底的な根強いお言葉を示し下されたのかは知らないけれど、かゝる言葉まで發せられた聖人の心の中は、現下の己れには——淋しい魂を抱ける己れには——諒解が出来るやうな氣がしてならぬのである。何れの方向にも進み得ざる己れが、唯一つ與えられた道を進まうとするに、何の理由があり得よう。其の道を歩かして戴くといふ事そのことだけが、目下の己れに取つての一大慰安ではないか。たとへその道が地獄への道であつたからとて、何の悔いがあるらうぞ。地獄へ行くべき己れが地獄への道を歩むといふことは、寧ろ當然すぎた過程でなくてはならぬ。然るに、善導大師はなほ記さ

れて曰く、

此の念を作す時、東の岸に忽に人の勸むる聲をきく。仁者但決定して此の道を尋ねて行け、必ず死の難なけん。若し住らば即ち死なんと。又西の岸の上に人ありて喚で言く、汝一心に正念にして、直に來れ、我れ能く汝を護らん。豫て水火の難に墮せんことを畏れざれと。此の人既に此に遣はし彼に喚ぶを聞て、即ち自ら身心を正當にして決定して道を尋て直に進て疑怯退の心を生せず。或は行くこと一分二分するに東の岸の群賊等喚で言く、仁者廻り來れ、此の道嶮惡にして過ることを得じ、必ず死なんこと疑はず。我等衆て惡心をもて相ひ向ふことなしと。此の人喚ぶ聲を聞くと雖も、亦廻顧す、一心に直に進で道を念て行くに須臾に即ち西の岸に到りて永く諸難を離る。善友相ひ見て慶樂已むことなし。

と。歎異抄にも亦次の様に記されてをる。

彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の説教虚言なるべからず。佛説まことにおはしまさば、善導の御釋虚言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然の仰そらごとならんや。法然の仰まことならば、親鸞がまをす旨またもて虚しかるべからず候歟。詮するところ、愚身の信心におきては此の如し。

と。實にお手厚いお諭しである。地獄へ行くべき己れが地獄への道を歩むことは、當然の過程であらねばならんなど、いかにも解つた様に踏み出した己れの魂は、こゝに粉碎されねばならぬ。地獄へ行く事が必然の己れであるが故に、地獄へ落つる事が當然だと觀念し得るほど潔い己れの魂であるならば、輪廻の業苦を其の昔に於て斷つことが出来たのであらう。落ちねばならぬ業苦につながつてをる

其の魂を抱いてをる己れであるが、落つることを自覺しない、久遠劫よりの魂なるが故に、唯一つの残された白道に足を踏み出しながら、果して何れにつながる道であらうかとの執拗な疑ひを生じたのである。眞劍になりかけた魂は又もや疑惶退心を生ずるのである。不徹底な倫理、道德、宗教、教育、哲學があと戻りをせしめんとするのである。かくすべからざるものなるが故に、かくはしなないと言ふ事を斷行し得る魂や、かくなすべきものなるが故にかくなして行くと言ふ事を決行し得るが如き魂の所有者は、實に正しい、純な、美はしい人であるであらう。然るに己れの魂はあらゆる方面が閉ざされてたゞ一筋の白道が與へられて、この道をのみ行く外にどうすることも出来ない窮地に立つて、躊躇し、決心して踏み出してもなほためらふやうな己れであるが故に、與へられたる道も益々狭く小さく

見えて進むことが出来ないのである。一步進んでは嘆息し、二歩進んでは泣くのである。こゝに「仁者但決定して此の道を尋ねて行け。必ず死の難なけん。若し住らば即ち死なん」との東岸よりの發遣の聲が、嘆息のうめきと涙との間を縫うてかすかに聞かれる。また「汝一心に正念にして、直に來れ、我れ能く汝を護らん。衆て水火の難に墮せんことを畏れざれ。」との西岸よりの招喚のみ聲が魂に閃く。漸時に其の聲は大きく確かに聞かれる。道はだん／＼廣く大きくなる。「直に來れ。」との言葉はこの窮地に立つた己れの魂には實に強く響く。

あゝ、道は與へられてをるのである。恵まれてをるのである。其の道に確かなる一步を踏み出し得た。己が魂は專念にこの一筋の白道を進んで眞實に生かして戴かねばならぬ。

發遣と招喚とのお聲は魂に徹した。この魂を抱いて己れの過去を顧みねばならぬ。そこに恐怖に満ちた業報が展開される。その上に如來の慈光が煌として照る。「念々稱名常懺悔」は己れの魂の今後のモットーであらねばならぬ。

慈光はるかにかふらしめ

ひかりのいたるところには

法喜をうとぞのべたまふ。

大安慰を歸命せよ。

(三) 無碍の大道

己れの魂が眞實に生き得る爲めに唯一筋の白き道が與へられてを
る。其の道を踏みながら、躊躇しつゝ、こゝに於ても「邪見」「僞慢」
「悪衆生」の本體を表さうとしてをる。さういふ矢先に發遣の御聲と
招喚の御聲とが魂に徹する。かくして確乎たる一步を踏出し得た。
再び「疑惶退心」を生じないで確乎たる歩みを運ばうとする其の道は
如何なる道であらうか。

善導大師は是を説明されて次の様にいふてをる。

中間の白道四五寸といふは、即ち衆生の貪瞋煩惱の中に能く清
淨なる願往生心を生ずるに喩ふ。乃ち貪瞋強に由るが故に、即ち
喩ふるに水火の如し。善心微なるが故に喩ふるに白道の如し。又

水波常に道を濕すとは、即ち愛心常に起て能く善心を染汚するに
喩ふ。又火焰常に道を焼くとは、即ち瞋嫌の心能く功德の法財を
焼くに喩ふ。人。道の上を行て直に西に向ふといふは即ち諸の行
業を廻して直に西方に向ふに喩ふ。東の岸に人の聲の勸め遣を聞
いて道を尋ねて直に西に進むといふは、即ち釋迦已に滅したまひ
て後の人見ざれども由は教法の尋ねべきあるに喩ふ。即ち是れを
喩ふるに聲の如し。或は行くこと一分二分するに群賊等喚び廻す
といふは、即ち別解別行惡見の人等妄りに見解を説いて迭に相ひ
惑亂し及び自ら罪を造て退失するに喩ふるなり。西の岸の上に人
ありて喚ぶといふは、即ち彌陀の願意に喩ふるなり。須臾に西岸
に到りて、善友相ひ見て喜ぶといふは、即ち衆生久しく生死に沈
て曠却に淪迴し迷倒して自ら纏て解脱するに由なし。仰て釋迦發

遣して西方に指向ふることを蒙り又彌陀の悲心招喚したまふに藉りて、今二尊の意に信順して水火の二河を顧みず念々に遣るることなく、彼の願力の道に乗じて命を捨て已後彼の國に生ずることを得、佛と相ひ見れば慶喜すること何ぞ極まらんに喩ふるなり。

と。是を親鸞聖人は「愚禿鈔下」に於て。

二河のなかについて、一の譬喩をときて信心を守護し、もて外邪異見の難をふせがんと。この道、東のきしより西のきしにいたるまで、またながさ百歩なりと。百歩とは、人壽百歳にたとふるなり。群賊悪獸とは、群賊とは、別解別行異見異執惡見邪心定散自力の心なり。惡獸とは六根六塵五陰四大なり。つねに惡友にしたがふとは、惡友とは、善友に對す。雜毒虛假の人なり。無人空迥の澤といふは、惡友なり。眞の善知識にあはざるなり。眞の言

は假に對し偽に對す。善知識とは、惡知識に對するなり、眞善知識、正善知識、實善知識、是善知識、善々知識、善性人なり。惡知識とは假善知識、偽善知識、邪善知識、虛善知識、非善知識、惡善知識、惡性人なり。

白道四五寸といふは、白道とは、白の言は黒に對す。道の言は路に對す。白とはすなはちこれ六度萬行定散なり。これすなはち自力小善の路なり。黒とはすなはち六趣四生二十五有十二類生の黒惡道なり。四・五寸とは四の言は四大の毒蛇にたとふるなり。五の言は五陰の惡獸にたとふるなり。

能生清淨願往生心といふは、無上の信心金剛の眞心を發起するなり。これは如來迴向の信樂なり。あるひはゆくこと一分二分すといふは、年歳時節にたとふるなり。

惡見人等といふは、憍慢懈怠邪見疑心の人なり。
また西のきしのうへに、ひとありてよばふていはく、なんじ一心
正念にしてただちにきたれ、われよくまもらんといふは、西のき
しのうへにひとありてよばふていはくとは、阿彌陀如來の誓願な
り。汝の言は行者なり。これすなはち必定の菩薩となづく、龍樹
大士の十住毘婆娑論にいはく、即時入必定となり。曇鸞菩薩の論
には、入正定聚之數といへり。善導和尚は、希有人なり、最勝人
なり、妙好人なり、好人なり、上々人なり、眞の佛弟子なりとい
へり。一心の言は、眞實の信心なり、正念の言は、選擇攝取本願
なり。また第一希有の行なり。金剛不壞の信なり。眞の言は、迴
に對し迂に對するなり。また直の言は、方便假門をすて、如來
大願の他力に歸せんとなり、諸佛出世の直説をあらはさしめんと

おぼしてなり。來の言は、去に對し生に對するなり、また報土に
還來せしめんとおぼしてなり。我の言は、盡十方無碍光如來なり
不可思議光佛なり。能の言は、不堪に對するなり、疑心の人なり、
護の言は、阿彌陀佛果成の正意をあらはすなり、また攝取不捨を
あらはすかほばせなり、すなはちこれ現生護念なり。念道の言は、
他力白道を念せよとなり、慶樂とは、慶の言は印可の言なり、獲
得の言なり。樂の言は、悦喜の言なり、歡喜踊躍なり。
あふひで、釋迦發遣しておしへて西方にむかはしめたまへること
をかうふるといふは順なり。また彌陀の悲心招喚したまふによる
といふは信なり。いま二尊のおん意に信順して、水火の二河をか
へりみず、念々にわするゝことなく、かの願力の道に乗せよとな
り。

と、説いてある。尙この「白道四・五寸」を聖人は、一層詳かに釋して、「顯淨土眞實信文類」の三、「至心信樂の願」の項に於て。

まことに知んぬ。二河の譬喩のなかに、白道四五寸といふは、白道は、白の言は黒に對するなり。白はすなはち選擇攝取の白業、往生廻向の淨業なり、黒はすなはちこれ無明煩惱の黒業、二乘人天の雜善なり。道の言は路に對せるなり。道はすなはちこれ本願一實の直道、大般涅槃、無上の大道なり。路はすなはちこれ二乘、三乘、萬善諸行の小路なり。四五寸といふは、衆生の四大五陰にたとふるなり。能生清淨願心といふは、金剛の信心を獲得するなり。本願力の廻向の大信心なるが故に、破壊すべからず。而して之を存覺上人は「六要鈔」に更に詳細に記されていふ。信心の白道、廣大無邊にして、實に無邊際なり。これについて

これを思ふに、凡夫行者のおこすところの信心は他方に由るが故に、これ廣大なりと雖も、貪瞋覆ふが故に、その心微なりといふ、實には狭小にめらず、これ四大五陰所成の凡身の上に於いておこすところの心なるが故に、四五寸といふ。

と。又親鸞聖人の高僧和讃、善導大師の讚に。

善導大師證をこひ

定散二心をひるがへし

貪瞋二河の譬喩をとき

弘願の信心守護せしむ。

經道滅盡ときいたり

如來出世の本意なる

弘願眞宗にあひぬれば

凡夫念じてささるなり。

佛法力の不思議には

諸邪業繫さはらねば

大小聖人みなながら

如來の弘誓に乗すなり。

煩惱具足と信知して

本願力に乗すれば

すなはち穢身すてはて、法性常樂證せしむ。
と讃歌されてをる。

十重二十重の煩惱慾に包まれて、何れかに踏み出さんとするも、踏み出し得ない苦痛に泣いて泣いた魂の最後の行きづまりに、かすかなる白道のあるのに氣付いて踏み出した道は、實に眞實報土なる浄土への唯一道であつた。

嘗ては「邪見憍慢惡衆生」とか「極重惡人」とか、「末代無智の在家止住の男女」とか、「五逆十惡の罪人」とかいふ言葉に少からざる反感を抱くと共に、かくまでに自己を卑下しなければ、佛の存在を知ることの出來ない宗教は少なくとも現代には適しないなどよさへ考へたことさへあつた。儻といふ皮を以て魂を包み、不徹底なる知識と言ふ緯を以てこれを巻き、飽くことなき慾望といふ經が其の上に綾なして、

眞實といふ道へ這入ることを避けて、己れの魂は何を考へつゝあつたか。いふまでもなく、惡と名のつくものゝすべてを考へつゝあつたではないか。否、今現に考へつつあるではないか。若しここにこの魂が、打懲さるべき鞭があるならば、その鞭をびしりと當てられて、血みどろになつた己の魂を抱いて、苦痛に泣きながら、この魂は救ひのみ聲を、聞ちみ佛のみ聲に耳を傾けるに違ひない。而してそこに一條の白道の脈々として續くのに氣付く。實に、かういふ具合に打ち碎かれて、而して謙虛になり得た魂にのみこの白道、この眞實道が開がれて、眞の人間たり得るのである。

大師は「一の白道あり、闢さ四五寸許なる可し」と述べられ、旅人はこの白道を見て、中間に一の白道を見れども極めて是れ狭小なり。」といふてをる。しかもこの白道は旅人なる己れが進まうとして築き

上げた道でないことは明かである。ありていにいへば、あらゆる方面を閉ざされて、進むことは勿論、退くことさへも出来ない己れの魂が、しかもじつとしてゐられないで、不安絶望のそのどん底より、換言すれば、從來の生活のすべてが外部へ外部へと走つてゐて一つとして眞實のものではないことに氣付いた眞の嘆きのどん底より、かすかに認め得た一道なのである。故に既に與へられてゐた、即ち、惠まれてゐた一道なのである。

この道を「闕さ四五寸」と言はれた大師の語には深い意味があらう。「衆生の貪瞋煩惱の中に能く清淨なる願往生心を生ずるに喩ふ。」とある。我が親鸞聖人は之を能生清淨願心といよは、金剛の信心を獲得するなり、本願力の廻向の大信心なるが故に破壊すべからず。」と言はれ、存覺上人は、凡夫行者のおこすところの信心は他力に由るが故

に、これ廣大なりと雖も、貪瞋覆ふが故に、その心微かなりといふ。と註されてゐる。

吾々は考へなくてはならぬ、而して氣付かなくてはならぬ。與へられたる一條の道に踏み出さうとして、踏み出すことを決せしめた汚穢な魂の何處かに、能生清淨願往生心といふ眞實性の潜んでゐたことを。

こゝに己の魂の過去を顧みねばならない。思ふやうに自己を振舞ひながらそこに不安がある。欲することを得んとして得られないところに悩みがある。愛しようとして愛することの出来ないそこに悶えがある。求めようとして求めることを得てもなほそこに悲哀がある。實にこの、思ふやうに振舞うたことも、欲したことも、愛しようとしたことも、求めようとして求め得たことも、眞實性からまるで異

つた不眞實性に根ざしてゐたことを思はねばならぬ。故にこゝに苦惱が生じるのである。眞實性を離れたる己れの世界は何れの方面に展開されて行つても苦惱ならざるはないのである。極言すれば、苦惱そのものを離れては自己の存在はないのである。即ち己れの魂の存在するといふことは己れの苦惱が存在するといふことである。己れの苦痛懊惱がかく切れ目もなく連続して行くと云ふことは、無限の過去から同じ苦痛懊惱を生すべき因果を踏みつゝ、一のサークル即ち六道内を堂々めぐりをしてをるといふことなのである。この苦惱を抱いてしみじみと己れ自身を省みるならば、己れ自身のすべてが、そこに意識されるではないか。眞に己れ自身の愛著すべき事を教へてくれるものは、眞實性に根ざした苦惱其のものではないか。其の苦惱が己れの力で、己れの魂でどうすることも出来ないもので

あればあるほど、己れをより明瞭に意識させるのである。

こゝに一つの危機が存する。それはおそろしい一大危機である。それは即ち白道に立ちながら發遣のみ聲にも、招喚のお呼び聲にも耳をかさずして、又は聴くことの出来ない境遇に生れた爲めに、一は己れの魂の力によつて作り出した道だと考へ、他はかくあることが人生の最終であると絶望して、邪見、僞慢なる外道となるか、又は宿命論者となつて悲しいあきらめに、淋しい一生を送るか、又はあやまつた自然主義に走つて、人生の罪惡の方面のみを曝露して行かうとする。而してこゝに果敢ない歡樂の夢を追うて其の苦惱をまぎらさうとするデカタン詩人の群があり、かしこに道德破産者の漂泊人の一團がある。しかも己れはかうした人々を冷やかに眺めたり、輕視したりすることが出来るほど僞慢であり得ない己れである。

寧ろその人々の舉動や、言語によつて己れの姿をはつきりと見出すことによつて涙ぐまざるを得ないのである。これは斷じて人ごとではない。己れ自身の姿である。己れ自身のあらはれである。世の中の多くの人の中にはこの苦惱苦痛と悲哀とを持ちながら、少しも考へようとはせず、寧ろこれをいゝかげんに胡魔化しておいて、そんなことは分りきつてゐるといふやうに澄ました顔で、世間のすべてを欺いておる偽善者がある。これも己れ自身の魂の一面ではあるが、かういふ人々よりも前の方の人々が一層自れには懐しみのある純な人々であるやうな氣さへするのである。しかし、己れは彼等の魂がそこを終點として再び苦惱の世界に迷ひ戻つた其の跡に踏み出すことは出来ない。己れは如何に苦しくとも、切なくとも、こゝを踏み越えて一步を前に出さねばならぬ。與えられたる一條の白き道に踏

み出さねばならぬ。否、一切の苦惱に堪へ得ずして、あるがまゝなる白道に押し出されたのである。さうして押し出されながらも現實の周圍を見渡す時、それ等の人々の悲痛な叫び聲を聞くとも、數限りなき人々の苦惱の有様を見て戰慄せざるを得ないのである。

こゝに發遣のお聲が魂に響く、招喚のお呼び聲が魂に徹する。苦惱のどん底、生死の苦海に冷たく凍り果てた魂の沈み行くそこにこそ、温かく育み下さる大悲のみ心の一ぱいが動いてをるのではないか。この大悲のみ心に觸れさせんが爲めの白道ではないか。押し出されて白道の入口に出た魂の中には、二尊のみ聲を聴き付け得る眞實性が既に己に恵まれてゐたのではないか。自力によつてあるとか、他力によつてあるとか、とはあまりに己れを知らぬ言葉である。恵まれたる白道の上を恵まれたる魂が歩む。それは、すべて二

尊のかくなさしめ給ふ大慈大悲の攝理の結果ではないか。たゞ仰ぎ、感激するのみである。己れは絶えず己れの周圍に押し寄せて來る果てしも知らぬ流轉の姿や、生死の苦海に動き搖ぐ大きな浪にも小さな波にも、一片の草にも、一匹の蟲の姿にも、みな悉く己れの魂に惠まれてある眞實性を淨化し、聖化し、眞化しなければ止まない大慈大悲の善巧攝化の結果であることに氣付かねばならぬ。己れを覺まさなければならぬ。

こゝに己れは、この世界を體驗せられた先達によつて正しく且つ深く導かれなくてはならない。

親鸞聖人は、彌陀如來の凡夫救済に就いて、各七高僧の説を正信偈に示されて、

如來所以興出世、 唯說彌陀本願海

五濁惡時群生海 應信如來如實言
 能發一念喜愛心 不斷煩惱得涅槃
 凡聖逆誘齊廻入 如衆水入海一味
 即ち

如來世に興出したまふ所以は

唯彌陀の本願海を説かんとなり

五濁惡時の群生海

應に如來如實の言を信すべし

能く一念喜愛の心を發せば

煩惱を斷せずして涅槃を得るなり

凡聖逆誘齊しく廻入すれば

衆水の海に入りて一味なるが如し。

——(聖典)——

と説かれておる。吾等凡夫が信ずるといふ一念に依つて如來の本願力に乗じなば、このまゝ、「得涅槃」の境地に入ることとを證せられ、しかも惑業によつて生き行く現實の吾等の不安を看破せられ、あと戻りをさせまいとの大悲から

攝取心光常照護 己能雖破無明闇

貪愛瞋憎之雲霧 常覆眞實信心天

譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇

即ち

攝取の心光は常に照護したまふ

己に能く無明の闇を破すと雖も

貪愛瞋憎の雲霧は

常に眞實信心の天に覆へり

譬へば日光の雲霧に覆はるれども

雲霧の下明かにして闇無きが如し、

——(聖典)——

と。恵まれた白道の上を恵まれた眞實の佛心に導かれて行く己れの魂に、久遠より薰習せる罪業の牽制強大にして其の白道も其の眞實性も曇り勝ちであるほど、吾等人間の現實に於ける生活のあさましさを反省し、反省する時、ただただ慚愧せざるを得ないのである。又、

極重惡人唯稱佛 我亦在彼攝取中

煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我

とある。即ち

極重の悪人は唯佛を稱すべし

我亦彼の攝取の中に在れども

煩惱に眼を障へて見たてまつらずと雖も

大悲倦きこと無くして常に我を照し給へり。

—(聖典)—

と。悪業しげき吾等凡夫の魂に恵まれた眞實性の一度開眼せられた上は、喜ぶと喜ばざるとの別なく、知ると知らざるとの論なく、常に照護されつゝあることを示されたのである。こゝに賢人、聖者によつてのみ開かれ行く宗教の本質が無智にして愚鈍なる吾等凡人の爲めにのみ開展された一切無碍の一道となるのである。こゝを歎異鈔には、

自力作善の人は、ひとへに他力をたのむ心缺けたるあひた、彌

陀の本願にあらず、しかれども、自力の心を頼して他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生を遂ぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死を離るゝことあるべからざるを憐みたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり、よて善人だに往生す、まして悪人は「と仰せ候ひき」と云々。

とある。恐ろしき悪業と飽くなき煩惱慾とに充ち満てるこの現實の我等の身體全體に如來大悲の願力が漲り溢れておることを證せられた言葉と味はれるのである。二尊の眞實によつて、二尊の眞實によつて築き上げられた白道を恵まれたる眞實の佛心によつて歩み行く己れの現身は、貪、瞋、愛、慾の水火に狂ふことを以て生活の全體とせる不眞實其のものであつて、聖人は愚禿悲歎速懐和讃に次の如

く示された。

浄土真宗に歸すんども 眞實の心はありがたし
虚假不實のわが身に 清淨の心もさらになし。

悪性さらにやめがたし こゝろは蛇蝎の如くなり
修善も雜毒なるゆゑに 虚假の行とぞなづけたる。

無慚無愧のこの身に まことのこゝろなければども
彌陀廻向の御名なれば 功德は十方にみちまふ。

小慈小悲もなき身に 有情利益はおもふまじ
如來の願船いまさずば 苦海をいかでか渡るべき。

蛇蝎齟詐のこゝろにて 自力修善はかなふまじ
如來の廻向をたのまでは 無慚無愧にてはてぞせん。

と。
概念の信仰は破れねばならぬ。自分勝手な信念は打碎かれねばならぬ。吾等凡夫の苦惱は苦惱其のもの、全體が、現身の主體であるが故に、この苦惱を外都から取除かうとしてもそれは斷じて取除き得るものではない。苦痛や苦惱に壓伏されて之に堪へ得ずして、これより逃れようとする所には解脱の道はないのであらう。寧ろ其の苦惱に面して己れの存在をしみじみと感得し、苦惱のよつて來るところを諦かに視きはめて、其の苦惱を忍受するところに興へられたる白道を見出し得べき眞實性が惠まれてをるのである。忍受することそのものに如來の大悲が漲つてをるのである。故に現身の主體で

ある苦惱其のものを取除いて後に、漸く如來の大慈悲に觸れるのではなくして、苦惱、煩惱にはだされたこのまゝ、即ち現身のまゝ、彌陀の廻向のみ名を惠まれて、眞實に生きるべき本當の道に導かれて行くのである。

こゝに「壓離穢土、欣求淨土」の信は成立するのである。

我が聖人は白道を註釋されて、「道の言は路に對せるなり。道はすなはちこれ本願一實の直道、大般涅槃、無上の大道なり。」と述べられてをる。われ等凡人が眞實報土に救濟せらるべく少しもあやうげのない平々坦々たる大道であるとの御言葉である。是れを高僧和讃には

萬行諸善の小路より 本願一實の大道に

歸入しぬれば涅槃の さとりはすなはちひらくなり。

と讃仰せられてをる。又、歎異鈔には

念佛者は無碍の一道なり。との謂いかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善も及ぶことなき故なりと、云々。

と。我が聖人の念佛に對する強い信念が告白されてをる。煩惱に眼をさへきられて、見ゆる白道はかすかであるけれども、そは無碍の一道であり、眞實の大道である。闇黒な無智な生活を營みながら、この闇黒のどん底で漲る光を仰ぐばかりの凡人である。しかも眞實の大道の上に如來の廻向によつて立たしめられたるが故に、苦惱の身をもつて苦惱になくこの凡人のまままで救はれて行くことに感激せざるを得ないのである。この身のままに、惠まれた念佛を稱へながら、其の念佛の力によつて己れを眞實に生きさせ給ふ如來大悲の願

力に随順するばかりである。

二、遇うて空しく過ぐるものなし。

(一) 人と生れしことの喜び。

ひそかにおもんみれば、人身うけがたく、佛教あひがたし。し
かるに今片州なれども人身をうけ、末代なれども佛教にあへり。
生死をはなれて、佛果にたよらんこと、いままさしくこれときな
り。このたびつとめずして、もし三途にかへりなば、まことにた
からのやまにいらて、手をむなしくしてかへらんがごとし。なか
んづくに、無常のかなしみは、まなこのまへにみたり、ひとりと
しても、たれかのがるべき。三惡の火坑は、あしのしたにあり。
佛法を行せずば、いかでか、まぬかれん。みなひと、こゝろをお

なじくして、ねんごろに佛道をもとむべし。

この文は蓮如上人によつて記された持名鈔の劈頭の一節である。一體、この世の中にありとあるものは、一として偶然に存するものではあるまい。たとひ私だちの目には偶然に見えることであつても、それは決して偶然に存するのではなくて、あらはれなくてはならない原因結果の法則に支配せられて出て來たものに相違ない。即ち、この世にありとあることは、皆必然の結果なのである。大きな宇宙間のどの一部にも、決して偶然はあり得ないのである。故に私だちにとつては、必然なことが偶然である程、現實の小さな一局部にもがき苦しんでをるのである。過去未來はいふまでもなく、現在さへも正しく知ることが出來ない無智なる魂を有する私だちは、現實といふ目先の一瞬時に囚はれて、これが私だちに與へられた唯一の「時」

であるが如く考へることによつて、之が最後のものであると誤認し、これが最終のものであると執着するのである。この誤認、この執着、罪業はこゝから發し、流轉はこゝを中心の軸として幾回となくめぐるのである。最後のもの、最終の時を執着することが、私だちの限りなき流轉の罪業を永久に残して行くことを考へると身の毛もよだつばかりである。しかしながら因果の大法則によつて推移して行く宇宙のあらゆるものは、この大法則の圏外に出づる筈がない。必然性の因果關係によつてのみ現れ來たる現象の中に、或る偶然性をもつた事象が混入するやうな不確かな因果の大法であらう筈はないのである。私だちに偶然なるが如く見ゆることは、私だちの理解することが出來ない深い且つ複雑な理法によつて動いてをるものである。即ち、偶然の事象の多いといふそのことは、人類の無智なる程度の

深いことを示す尺度であらねばならぬ。あらゆるものを偶然とあきらめて小さな怒と、小さな假樂との中に其の生を過ごして行かうとする私達には、^中生も死も偶然の出来事のやうに見える。しかし、凡ての人類の等しく到達せねばならぬ最終のものは死である。人生の眞意義を解決し得たる人も、又、その意義を解決し得ない人も、同じく死といふ一色の布を以て蔽はれてしまふことは、否みがたい嚴肅なる事實である。而して、其の死の事實に歸着することが、凡てのものが完成せられた後に到達するのであるとは限られてゐない。譬へば、萌え出でんとする春の若草が、荷車の轍に踏みにじられて、その生の根を絶やさるゝこともあらう、美しく咲き出でんとするふくよかな蕾が、未だ花にもならないで筆り取らるゝこともあらう。こゝに無常がある。こゝに無常の嘆を感ぜざるを得ない。而してこ

の無常そのものに宇宙の真相の具體化を氣付かねばならぬ。否、この無常を無常と感じ得る人として生れ出でたる事實が、已に恵まれたることであると氣付かねばならぬ。かくして「人身うけがたく」の眞の意味を知ることが出来るのである。

科學は長足の進歩をなした。現代は科學萬能の時代とさへ叫ばれてゐる。しかしながら、それ等萬能を以て任ずる科學者が、どれだけの仕事を吾々の世界に成し得たか。化學者の苦心精勵の結果が、有機物に於てたゞ一の尿素を試験管の中に作り得たのみではないか。一人の人間を作り出すことが出来るか。否、この地球上に科學者の手に依て、生きた人間を作る得ることは許されることであらうか。出来るとしてからが、それはあまりに前途遼遠なことであらう。否、否、人間どころではない。一のアミープをすら、いづれの年に、果

して人の手に依て作られることであらうか。私たちがそれを信ずるには、科學の力はあまりに微かである。醫學は實に巧妙を極むるまでに發達した。藥物の研究は細緻を極めてゐる。しかも不死の術や靈藥の發見も調合も未だ耳にしない。死を取り止むべき藥の皆無は、之を蓬萊の山に求めて得なかつた秦の始皇帝の時代も、現今も何の變りはないのである。

なる程科學は非常なる進歩をしてゐる。五十年、百年以前の私たちの曾祖父、曾祖母たちをこの世に蘇生せしめたら、空を飛ぶ機、水を潜る船を見て、これがこの世のものであらうとは信せぬかも知れぬ。然しながら、之を悠久なる時の上に現はれつゝある大自然の大事實の上に比べて見るならば、それは、人智の發達として誇るにはあまりに憐れなものではなかうか。

如何に賢者であり、智者であつても、明日の日に己が身の上によりかゝる前業のさだめを知り得ざる程悲しい人間である。如何に醫記博覽の人でも、前世はおろか、生れ出で、後或る期間をすら記憶し得ざる程愚かなる人間である。大自然の下に、さかしらをする人間の力がどれ程小さいかに氣付かねばならぬ。實に弱いものは人の力である。實に悲しいものは人の命である。科學者が如何に彼等の萬能と信ずる力を以てしても、彼等が、自然の偉力に逆つて、一つの事が成就するであらうか。否、否、彼等が自然を征服しつゝありと信じてをることとは、皆、自然に順應してをることであつて、即ち自然そのものゝ力であるのだ。

しかしながら、この弱き力、悲しき命の所有者たるが故に、そこに私たちが永劫に生きるべき、即ち救はれて行くべき無碍の大道は

開かれてをるのである。その大道に導かるべく人としての生が恵まれてをるのである。自然はそれ程大きい。こゝに私たちの生の意義がある。その弱さ、その悲しさ、それが私たち人間を永劫に生きさせるのである。永劫に救ふのである。

即ち人としてこの世に生れ出でたその事が、既に一大恩寵の結果なのである。實に私たちは、人間として生れ出でたことが、如何に深厚なる因縁和合の結果であるかを思はねばならぬ。而して、人としての私たちの存在を自覚する時、私たちは両親を想はねばならぬ。己れの生の延長は親と子とであることに氣付く。父母に對する孝養も、子に對する慈愛も、歸するところ、己れの生の満足に外ならぬいではないか。道德的に如何に説かうとも、こゝを逸しては、父母もなければ、子もありはしない。

こゝに存覺上人によつて記された「報恩記」の中の二つの法話を思ひ出さずには居られない。

昔、雪山に、一の鸚鵡あり。父母目しひたり。子つねに、好菓を求めて、目しひたる親にあたふ。ときに、一人の田主あり、田をうる時、願をおこして、この田の稻穀をもて、一切衆生に施さんといひき。かの鸚鵡、田主の施心をよろこびて、常にかの穀をとりて、父母に供しき。然るに、田主鸚鵡の田をふみ、穀を取るをみて、急に瞋恚をおこし、網をはりて、かの鸚鵡を取りて、その所行をいましむるところに、鸚鵡のべていふやう、田主、此の田をうるしときに、一切衆生にあたふべきよし、意願をおこしき。我むしろ、一切衆生の中にもれんや。しかればこれをとるごと、何ぞ科に處せん。いはんや、我が爲にこれを取らず、目しひ

たる父母に供せんがためなり。争か憐愍なからん。しかれども田主制止して、この故に瞋恚をおこさば、われ自今以後、更に取り取るべからずと申し、かば、田主たちまぢにかなしみはなちて、汝孝養のために、これをとること、かへすがへす感じ思ふところなり。つねに、はやくこれを取りて、父母に孝養すべし。あへて慳惜すべからずといふ。これによりて、かの鸚鵡、いよいよその稻穀を取りて、父母に供しき。

佛またこの因縁を説いて、其の田主といふは、舍利弗なり。盲目の父母といふは、則ち淨飯大王、摩耶夫人なり。昔の孝養の因に依つて、いま成佛することを得たりとのたまへり。これは雜寶藏經の説なり。畜生も、人身も恩を報すべきこと、先蹤分明なり。凡夫も、佛も、徳を謝すべきこと、佛説炳焉なり。」

何と因縁に就いての趣き深い物語ではないか。

雜惡虚假の凡夫なる私だちにも、恵まれたみ佛の光に照らされて時たま田主のやうな善事を行はんとする心のおこる時もある。而しておこる心の下から煩惱の雲に蔽はれて、瞋恚の焔に焼かれるのが私だちのあはれなる性である。して見れば、「田主」が瞋恚に燃えた姿は、私だち自身の姿に外ならぬ。

いま一つの法話は次の如きものである。

三州の義士といふことあり。其の因縁は、四方より行きあへる道の辻に一の塔あり。三方より、三人の男、この所に来り集る。各々その住せる所をとひ、互に其のきたれる由を尋ぬ。みな父に後

れて、悲しみを含み、思に堪へずして流浪する由をかたる。生國
みな異れども、悲歎ことごとく同じ。

又、一方より來たれる老翁あり。三人、その來たれる故を問ふ
に、翁のいふやう、われ子息におくれて、悲しみを含むが故に、
流浪してこゝに來たれる旨を答る。これによりて、三人の男、一
翁をもて父として、議して一處にあつて、老翁に孝順す。一事一
言、かつて其の命をそむかず。九夏三伏の炎天には、扇をもて枕
をあふぎ、立冬素雪の寒夜には、席を温めて孝を致す。凡て、飲
食、衣服、臥具、湯藥、力のたふるところ、心の及ぶところ、こ
れを求めて供せずといふことなし。

かくの如くして年月を送るところに、或る時、老翁三子に向ひ
て言ひけるは、汝等、我を親と思ひて、萬事に意にそむかず、我
れ又、汝等を子と思ひて、深く孝順をたのむ。しかるにわれ一の
所願あり。汝等、はやくこれを營みて、我が願を満つべし。いは
ゆる我が住所の前の大河の中に、殊勝の宮殿を作りて、我をして
其の中に置くべしといふ。

三子これを聞いて、各々領狀すといへども、たがひに相歎くや
う、この河きはめて深廣にして、水はやく、波しきりなり。輒く
家を造りがたし。然るに、父の命に隨はんがために、七日の間、
土石を運びて、島を築くに、微塵もとよまらず。三子、心を同じ
く、歎くこと極なし。悲しい哉、我等幼少にして父に後れてのち、
責も親をこふる志に依りて、老翁に歸して孝順をいたす。父子の
契約をなし、より以來、露ばかりも其の意に違ふことなし。今こ
の一事かなはずして、其の命にそむかば、不幸の過のがれがたし。

願くば天地我が志を憐みて、我が孝養を成さしめ給へと。慇懃にこれを念願するに、其の夜俄かに天地搖動し、雷電振烈することおびたゞし。夜あけて彼の河を見て、河の中に靈岸立ち廻りて中に平地あり。上に宮殿あり。金をもて牀とし、錦をもて蓐とし、瑠璃を以て簾とし、摩尼をもて燈とせり。忉利天の喜見城もかくやと覺ゆ。……中略……

今此の因縁を案ずるに、實の親にあらざれども、親と名づけて孝行の志を致し、かば、佛天隨喜して如様の不思議あり。何ぞ況んや、多生の宿縁に依つて、親子となり、幼少より撫育の恩を受けし實の父母に於てをや。報じても猶報じ、謝しても又謝すべきなり。つらつらこれを思ふに、我等は、三界流浪の孤なり。かの三州の義士の如し。釋尊は、衆生覆護の慈父なり。かの一路の老

翁に似たり。しかれば、釋尊の教勅に順して、彌陀の名號を稱せば、生死の大海の中に何ぞ不退の宮殿をまうけざらんや。」と。

親を夫つた三州の義士の歎は、やがて私だちの悲しみであり、子に先だゝれた一翁の悲しみは、やがて私だちの歎である。即ちこの物語は、現實に於ける私たち人間の悲歎そのまゝであることを味はねばならぬ。

親と子との恩愛の絆に引きずられて行くそのことが、一切の罪業の根源であると教へられても、この羈絆を断ち切ることの出来ない愛執に泣く果敢ない有様が、私だちの現實である。

この現實に泣きながら、「人身うけがたく、佛教あひがたし」との持名鈔のお言葉を味ふとき、苦惱の連続によつて流轉しさまよふこと

の外に、どうすることも出来ない私たちが、今遇ひがたくして遇ひ得たるみ佛の教を、真劍になつて味ひ、真劍になつて聽いてゐるであらうか。

かういふあふない瀬戸際に立ちながらも、心の中は常に我執が働いてゐる。どうして、かくまで我執の深いことであらうと、つくづく己れ自らあきれざるを得ない。刻一刻、念一念と變轉してやまな己れの心を探へて、我が信ずるとか、わが參るとかと、己れの小さな心のみを囚はれて、大きなみ佛の大み心にふれようとはしない。それが私たちの悲しい現實である。

あがいても、もがいても、この現實を否定することは出来まい。さう考へることは私たちにとつてこの上もなく淋しい悲しいことであるには違ひない。しかし事實はこれを如何ともすることが出来な

いつはらざる人間の事實である。

生きることを願つて、生きることを呪ひ、死することを厭うて、死することを願つてをる。一時たりとも生死の巻を離れられずにもがき苦しんでゐる。何といふはかない人生であらう。何といふみじめな人間であらう。

かやうな私たちが、どうして自分みづからの力を以て救はれよう。かくの如き私であるから阿彌陀如來の五劫思惟の願によつてのみ救はれて行く外、何れの途も私には駄目なのである。

私たちのこの現實の悲しさ、淋しさ、煩惱の間、火宅の苦にもがいて、つくづく己れ自らの力の足らざるを知つた今こそ、實に「未代なれども佛教にあつた時なのである。生死をはなれて、佛果にたよ

らんこと、今まさしくこの時なのである。
あゝ、私たちは淋しくも悲しい現實をまともにしみじみと見なく
てはならない。

そこに大いなる救ひの御手、如來の慈悲が無限に擴げられてをる
ことに氣付くであらう。

(三) 本願力

これは正しい善いことであると、知りながら、或は又教へられな
がら、その正しい善い方に進み行くことの出来ない私たち、これは
邪惡なことであるから避けねばならぬと知りながら、しかも避ける
ことの出来ない業繫に縛られて、働くことの出来ない私たちが、救
はれて行きたゞ一つの道は「純他力」といふみ佛のお慈悲一つであらう。
しからは純他力とは何であるか。

そは少しもまざりけのないみ佛の力と言ふことであつて、親鸞聖
人は、これを「他力」とは本願力なり」と的示されてをる。

「安心決定鈔」の最初に

浄土真宗の行者は、まづ本願のおこりを存知すべきなり。弘誓

は四十八願なれども、第十八の願を本意とす。餘の四十七はこの願を信せしめんが爲なり。」と

述べられてある。即ち本願力とは第十八願の意であることは明かである。

さて、その四十八願とは何であるかといふに、「大無量壽經によれば、阿彌陀佛未だ佛の位に入り給はざりし以前、即ち法藏菩薩なる菩薩の位にましまして、四十八通りの志願を起させられたのである。その四十八願のいづれも皆、迷へる私たち救済の大弘誓であるが、中にも第十八の願はその骨子でありて、他の四十七願は、つまりこの願を信せしめんが爲めなのである。

然らばその第十八願とは如何なる願であるか。

親鸞聖人は、「教行信證」の信卷に於て、この願に就いて五つ通りの

名を擧げられてをる。即ち念佛往生之願、選釋本願、本願三心之願。往生信心之願、至心信樂之願がそれである。かく、名は幾様に列ねてあつても、それは解釋のしやうによつてであらう。念佛に重きを措くか、信心に重きを措くかは、實に我が聖人の明快なる批判と眞意とにまたねばならぬ。

末燈鈔に

この世の念佛の義は、やうやうに異りあうて候ふめれば、とかく申すにおよばず候へども、故聖人の御教をよくよく承りて在します人々は今ももとのやうに異らせたまふこと候はず。世かくれなきことなれば聞かせたまひあうて候ふらん。淨土宗の義みな異りて在しましあうて候ふ人々も聖人の御弟子にて候へども、やうやうに義をも言ひかへなどして身も惑ひ人をも惑はかしあうて候

ふゆり、淺間しきことにて候ふなり。
と記されてをる。これを以て見れば、時の到るにつれて私だちは皆誤つた考へをもつやうになるのである。故にこゝに注意して、聖人の眞意のあるところを考へなければならぬ。

「信卷」に親鸞聖人はこの第十八願を

「眞に知んぬ。至心、信樂、欲生、其の言葉異なりと雖も、其の意惟一つなり。何を以ての故に、三心己に疑蓋雜はること無し。故に眞實の一心是を金剛の眞心と名づく。金剛の眞心是を眞實の信心と名づく。眞實の信心には必ず名號具す。名號には必ずしも願力の信を具せざるなり」

と云つて、鋭い斷案を下されてをる。即ち眞實の信心には必ず名號を具してゐるのである。「名號には必ずしも願力の信を具してゐないの

である。私だちはこの言葉、この斷案に就いて、深く而も眞直に味はねばならぬ。願力の催しに依つて、起さるゝ凡夫の信には、名號は自ら具備せらるゝのであると。

「二念多念証文」に於て、八十五歳にならせられた親鸞聖人は、この事を氣遣はれて、

「今、信知彌陀本弘誓願及正名號といふは、如來のちかひを信知すとまうすこゝろなり。信といふは金剛心なり。知といふはしるといふ、煩惱惡業の衆生をみちびきたまふとしるなり。また知といふは觀なり、こゝろにうかべおもふを觀といふ。こゝろにうかべしるを知といふなり、及正名號といふは、及はおよぶといふ、およぶといふは、かねたるこゝろなり。また正ははかりといふこゝろなり。はかりといふは、ものほどをさだむることなり。名號

を正すること、ひとこゑひとこゑ、きくひとうたがふこゝろ一念もなければ、實報土へむまるとまうすこゝろなり。また阿彌陀經の七日もしは一日、名號をとなふべしとなり。これは多念の證文なり。おもうやうにはまうしあらはさねども、これにて一念多念のあらそひあるまじきことは、おしはからせたまふべし。淨土眞宗のならひには、念佛往生とまうすなり。またく一念往生多念往生とまうすことなし。

と、たゞ願力によりて催さるゝ信一つに信順せられたる聖人の廣大を仰がねばならぬ。自分の力ではなく、全く如來の御力のみにて救はるゝのである。己の力によりて起る小さな信ではないのだ。「信せさせたまふは佛智なり」とありて、信じ得るが如き力ある己れではなく、願力によつて信せさせて下さるのである。

こゝに、他力と言ひ、自力と言ふが如き相對界を超越せる願力と、他力とか自力とか言ふ争ひをなし得る境界にまでも進み得ざる愚劣の我身なることとを思はねばならぬ。

抑もこの「信」なる文字は、梵語の波羅沙陀^{プラサダ}を譯したもので、其の意味は、「恵み」あなたの「御陰、恩恵、親切、慈悲深い心、やさしい心、静寂、光輝、不淨を除く、不淨より解脱する」等の深い意義を有する文字である。然らば、この十義一つ一つの意を己が心に照し合はして考へて見る時、只の一つの徳をも己の心から出づるものではない、皆己れの心にはあてはまらないことに氣付く。即ちこれが如來の願力によつて生ずる佛智不思議の御心であらう。

しかもこれが如來の御心であるといふばかりではなく、本願力の催しによつて、汚穢な凡夫の心に「さういふ心持を催し起こさしめる」

といふ意味までも含んでゐるのである。

これを『末燈鈔』の『自然法爾章』に

「自然といふは、自は『おのづから』といふ、行者のはからひにあらず、『然』といふは『しからしむる』といふことばなり。『しからしむ』といふは、行者の計にあらず、如來の誓にてあるが故に『法爾』といふ。『法爾』といふはこの如來の御誓なるが故に然らしむるを『法爾』といふなり。法爾はこの御誓なりける故に、およそ行者の計の無きを以て、この法の徳の故に然らしむといふなり。すべて人のはじめてはからはざるなり。このゆるに義なきを義とすと知るべしとなり。『自然』といふは『もとより然らしむる』といふことばなり。彌陀佛の御誓のもとより行者の計にあらずして『南無阿彌陀佛』とたのませたまひて迎へん』と計らはせたまひたるによりて、行者善からんとも

悉しからんとも思はぬを『自然』とは申すぞと聞きて候。誓のやうは『無上佛に成らしめん』と誓ひまへるなり

と、説かれてをる。實に純の純なるもので、私だちはまことに法爾の御はからひであることを信する外はないのである。

浄土和讃の『讚彌陀偈』の中に

若不生者のちかひゆへ

信樂まことにときいたり、

一念度喜するひとは、

往生かならずさだまりぬ。

といひ、

又、同じく『大經意』のところには

至心信樂欲生と

十方諸有をすゝめてぞ

不思議の誓願あらはして 眞實報土の因とする

と、説かれてをる。

これ共に等十八願のおちかひの意でありて、本願力の讃仰である。この故に、私たちがこのお誓のお言葉を私達の心にかみしめて、すなほに之を味ふならば、必ず如來は私たちを助けて往生させて下さる。若しも淨土に生れさせることが出来なかつたならば、正覺を開いた佛陀とはいはれないと、如來御身を勿體なくも賭物にして、その決して間違ひない事を示されてお誓ひ下されたのであらう。疑ひ深い、救はるゝことの出来ない私たちの言葉を以て言ひ表はすならば、私どもが助けられなかつたならば、阿彌陀如來の十方世界に充ち満てる光明も消え失せて、極樂はこはれてしまひ、全く暗黒になるといふことであらう。

然るに事實暗黒にならない實證は、幾多の先達の言著によつても、又、多くの妙行人の實例によつてもわかることとて、「信樂まことにと

きいたり」の眞實であることや、「一念慶喜するひと」の實際によつても明示されてをるのである。

かういふ實證と事實とを私たちの前に展開して示したまふといふことは、是れ皆如來の善巧攝化の結果に外ならぬのであつて、私たちは如來のお慈悲の透徹せることを深く味はねばならないのである。しかしこゝに一つの驕慢が生ずる。

そは慈悲を喜びたいといふこゝろである。よろこび得るこゝろの起るといふことが、お慈悲の徹したこゝろであらねばならぬかの如く考へることである。さう考へたならば、よろこびのこゝろになれない時には、それが自然氣になる。氣になるから少しでもよろこびのやうな心がおこつて來ると、これでといふ驕慢心が兆さず。

こゝのところを「蓮如上人御一代聞書」には

一人の身には、眼耳鼻舌身意の六賊ありて、善心を奪ふ、これは諸行のことなり。念佛はしからず。佛智の心をうるゆへに、貪瞋癡の煩惱をば、佛の方より刹那にけしたまふなり。故に貪瞋煩惱中、能生清淨願往生心といへり。正信偈には、譬如日光覆雲霧、雲霧之下明無闇といり。

と示されてあつて、よろこぶべきことをよろこび得ないほど淺ましい凡夫の現身であることを説き聞かされてある。

又、同書に

「よろこべ、助けたまはんと、仰せられ候ことにてもなく候。たのむ衆生を助けたまはんとの本願にて候」と的示されてある。

小さな私たちの無智な心で無限廣大な願力を推し測ることは出来

ない。この有様に迷ふ私たち凡夫の心に同情されて我が親鸞聖人は歎異鈔に「よろこばぬにて、往生は一定とおもひたまふべきなり」と、如來の慈光に隈なく、在るもの一切をそのままに認めて包括せられたのである。

この言葉に信順して、私たちの「よろこぶ」といふ状態を考へて見ると、喜びといふのは悲しみの反對であつて、即ち苦痛を逃れて快樂にふけりたいといふのと同じであらう。快樂に耽りたいといふことは、感覺的満足を得たいといふことである。これ即ち泡沫に等しき慾望に過ぎない。慾望が遂げ得らるゝといふことは、正しい意味の解脱ではなくて、寧ろ流轉輪廻の罪業であらう。かくして私たちはいつ果つべしともわからない時の連鎖を迷ひ行く衆生であらねばならぬ。こゝに「よろこばぬにて、往生は一定とおもひたまふべきなり」

とのお言葉が、骨身にしみ徹るのである。

勿論、よろこびは願力に催さるゝ信によりて起るものであつて、私だちの驕慢によつて起るものでは、断じてない。さればこそ、「よろこびにかまひ候も、はからひにて候ふなり。」との御言葉があるのである。こは實に機微なる問題である。深く反省せねばならぬ。

歎異鈔の第十二章に

「たとひ諸門こそりて『念佛はかひなき人のためなり、その宗淺し陋し』といふとも、更に争はずして『われらが如く、下根の凡夫、一文不通の者の信すればたすかるよし、承りて信じ候へば、さらに上根の人のためには陋しくともわれらがためには最上の法にてまします。たとひ自餘の教法は勝れたりとも己がためには器量およばざれば勤めがたし。われもひともし生死を離れんことこそ諸佛の

御本意にておはしませば、御妨げあるべからず』とて、にくい氣せずば、誰の人かありて仇をなすべきや。かつは『諍論のところにはもろもろの煩惱おこる、智者遠離すべき』よしの證さふらふにこそ。故聖人の仰には『この法をば信する衆生もあり、誘る衆生もあるべし』と佛説きおかせ給ひたることなれば、われはすでに信じたてまつる、又ひとありて誘るには『佛説まことなりけり』と知られ候。しかれば『住生はいよいよ一定』とおもひたまふべきなり。」と説かれてをる。

念佛が易行であるが故にとか、餘行にすぐれたるが故にとかいふ争論は、昔も今も變りなくくりかへされることであらう。そは實に人間の醜惡を曝露した言葉である。言換れば、かゝる論争は、人のための法であつて、己れのための法でないことを露してゐる。「救ひ

とは、人の爲めではなくて、己れ自らのためである。即ち如來と己れとの間接的交渉ではなくして、何者の介在をも許さぬ直接交渉のものである。正邪善惡を取捨することも知らぬ下根の凡夫、一文不通の者の信すれば助かるよし、承りて信する私たちにとつての唯一つ與へられたる念佛であつて、「自餘の教法はすぐれたりとも、自らがためには器量およばぬ嘆きがあらう。こゝに如來のやるせない切ない慈悲が動いて、念佛一つで願力に攝取されて行くのである。私一個の存在のための本願力の顯現ではないか。其の本願力の具象化が即ち念佛ではないか。易きが故の念佛でもなければ、勝れたるが故の念佛でもない。私一個の存在の故の念佛なのである。それ故に、私といふものが、消えてしまふことがあるならば、念佛も亦消えてしまふ。私の罪業の消えない限り、念佛も亦現存して行くのである。

私たちの稱ふる念佛が、報謝の稱名であるのか、喜びの稱名であるのか、或は又その他の意味を有する稱名であるのか、それは私たち自身にもわからぬ。「名號を不思議と一念信じ稱へつるうへは、何條わがはからひをいたすべき。きゝわけしりわくるなど、わづらはしくは仰せられ候ふやらん。これみなひがごとくに候ふなり。」と。考へ、思ひ、煩ふことによりて、益々小さな計ひを増すばかりではなからうか。私たちはたゞ願力に乗せられて、稱するばかりである。

「持名鈔」に

「阿彌陀如來の本願は、十惡も、五逆も、みな攝して、さらはるるものもなく、すてらるゝものもなし。安養の淨土は、謗法も聞提も、ひとしくむまれて、もるゝひともなく。のこるひともし。彌佛の淨土にきはれたる五障の女人は、かたじけなく、聞名往

生の益にあづかり、無間のほのほにまつはるべき五逆の罪人はす
でに滅罪得生の證をあらはす。されば、超世の悲願ともなづけ、
不共の利生とも號す。かゝる殊勝の法なるがゆへに、これを行す
れば、諸佛菩薩の擁護にあづかり、これを修すれば、諸天善神の
加護をかうむる、たゞねがふべきは西方の淨土、行すべきは念佛
の一行なり。」

と明記されてをる。

たゞ恵まれたる念佛の一道によつてのみ、私凡夫は、横超の願力
を仰ぐ外はないのである。人々ではない、私自身なのである。

淋しさに徹せねばならない。悲しみに至極せねば駄目である。

私自身は如何に弱き、如何に無智なものであるかとは、一時的に氣
付くが、相對的に人と吾と相接する時、その一時的の氣付きは、直

ちに頭をひつ込めて、小さな私、即ちえらがらうとする心がむくむ
くと頭を起して來るのが私である。淋しさに徹し、悲しみに至極し
た私にはそんな小我の頭を擡げることが許さない筈である。そこに
「純他力」の心が生ずるのだ。否、生じさせられるのだ。しみじみと私
がわかるのである。否、わからして貰へるのである。

その生じさして戴く、そのわらかして貰へる力こそ、み佛の大慈
大悲の願力なのである。實に廣大なる普遍の大御力である。

(三) 遇無空過者

「あきらめられぬとあきらめたいふ語は、よく聞く言葉で、又、よく言ふ言葉である。現世の生活に悩む私だちにとつては、實によく穿ち得た言葉であると思ふ。然しながら、随分苦しいあきらめ方であることは事實である。否、あきらめるといふこととそれ自身が既に強烈なる苦しみではないか。要するに苦しみといふ事實をあきらめといふ形式に代へたといふだけである。即ち苦しみに對して手段も方法も盡きてしまつたのだ。人の力の行きづまりである。

他の人の苦痛を聞いて、之を救ふべき方法が、何等己れに於て見付からぬと、たゞわけもなくおあきらめなさいといふ。かゝることを無難作にいふ人は、他の人の苦しみの深さも、あきらめの痛さも

知らない人であつて、たゞこの「おあきらめなさい」が他の人の苦しみに對する挨拶であり、慰めであると心得てをるのである。

然しながら、深刻な苦痛に悩んでゐるところの人は、他の人の「あきらめよ」といふ言葉を聞かすとも、自らあきらめようとするのであるけれど、それは「あきらめ」の出来る程度の浅いものではないのだ。それがどうしても出来ぬ故に、「あきらめられぬとあきらめたい」など、あきらめられない苦しさを「あきらめたい」といふ語を以て極度にあらはさうとするのである。換言すればもう言語に絶してゐるのである。

「ものいへば唇さむし秋の風」との芭蕉の句があるが、深くこの世の中の有様を考へて見ると、反覆常なく、有爲轉變の冷たい現世の事實は、この翁の一句にことごとく盡きてゐると思ふ。

然らば、一切の事は何も言はぬに限るか。言はんで済むことなら、

言はんで済ますことが誠に結構であるかも知れぬ。しかしそこが凡夫である。言はなければ言はぬで、そこに一種の食ひ入るような淋しさを感ずることをどうともすることが出来ぬ。

この術なげな切ないころがあらゆる場合、あらゆる時に於て、私だちを苦しめるのである。書に向ふ時にも、遊ぶ時にも、働く時にも、話する時にも、戀する時にも、戀せぬ時にも、喜ぶ時にも、悲しむ時にも、怒る時にも、笑ふ時にも、常に暗い陰を宿してゐるのである。何といふいたましい心であらう。何といふ悲しい事實であらう。花咲く春を喜ぶころの奥には萬木枯る、秋の凋落を思ふ寂しい心が潜んでゐる。歡樂の底に哀情の影がさす。友の成功を喜ぶ心の陰には、友の失敗を思ふ邪惡なころが隠れてゐる。人の悲惨なる運命の結果を眺めて歎く心の底には、己れでなかつたことを

喜ぶ惡魔のこゝが閃いてゐる。ある大官がある不正事件に連座して法庭にその醜惡を曝露した事實を、新聞の記事に依つて知つたとする。誰でもそれを憤慨せぬものはあるまい。よい氣味だと思はないものはあるまい。而しながらよい氣味だといふ心の底を見つめて見れば、たゞ高官の破廉恥をのみ罵つてはゐられまい。己れ自身がかゝる不正事件を容易になし得る地位に置かれた時はどうであらうかと考へたなら、よい氣味だといふ側面には、自らの地位の卑くして、高位を羨やむ一面が存じはしないか。傷ましい心ではないか。時にはこの傷ましい心が、我が身ながら淺ましく呪はしくなることさへある。しかも時には、其の心がすべてのものに對して、己れを忘れるやうな満足を覺えることもある。しかしそれは一瞬時にして消えて行く。而してそれ等の心が去つたあとの私はすべてのものゝ

上に悲しみに満ちた寂しい己れの影を認めざるを得ない。

田舎は淋しいといふ。しかしそれは外形の上のことである。大都會の眞只中に生活しながら、己れの孤獨なることを眞實に知つた時ほど淋しいことは他にはあるまいと思ふ。還境の静けさの中にあるの淋しさよりも、熱鬧の周圍に於ける己れ一人の淋しさこそは比ぶべきものゝない淋しさであらう。

外形との經緯を絶つて自己を見つめたところの人は、己れの孤獨なることを眞に味はずにはゐられまい。而してこの淋しさは私だちの心の中核に常に巢喰うてゐるのである。さうしてこの心のさびしさを眞實に知つて呉れるのを求めて止まぬのである。還境の騷擾は、この心を一時的に胡摩化してをるが、この淋しさは私だちの終生のものなることをどうしよう。己れの眞の心が、還境の騷擾から離れ

る時、ひしひしと心に迫る淋しさは止めようとしても止めることは出来ぬ。故に私だちのこの淋しさを眞實に知つて呉れるものゝ求めは、實に強い欲求である。

この欲求に燃える、そこに二つの道がある。

一は前章に述べた「たゞ一筋の白き道へ」の分道であつて、佛智不思議に救はれて願力に乗せしめられて人生の眞實の道を歩むことが出来ることゝ、他は安價なる「あきらめ」に墮して、自暴自棄に陥つて行くか、又はこれを宿命と觀じて悲痛そのものをみつめつゝ泣き乍ら生きて行かうとする眞に不幸の人々とである。後者に屬する人々は、懷疑派に屬する文學者などに多くその例を見る事が出来る。殊に近代の専制政治、否、壟斷政治に惱まされたロシヤが生んだトルストイや、ツルゲネエフやドストエフスキーの様な人々は、人生のこ

の悲惨をどん底から味つたやうに思はれる。こゝに私は「人身うけがたし、佛法き、難し」のお言葉を痛切に味はさしていたゞくのである、私たちの若い可憐な同胞たちは、この眞の淋しさに到達した時、或るものは酒によつて其のこゝろの空しさを満さうとする。或るものは異性の愛を求めて之を補はうとする。或るものは單なる性慾を満足させることによつてこの心を胡摩化さうとする。而してかういふ人だちを世の道學者だちが見た時に、「彼等は墮落せり」といふ簡單なる嘲罵を以て、救ふべからざるものとして遇せんとするが、それはあまりに悲しい淺薄なことではないかと思ふ。徒らに罪惡だ、墮落だと責めることはどうであらう。よしんば、それが罪惡であらうと、責むべきことであらうと、墮落であらうと、彼等若きものがその場合それより外に他に取るべき方途を見出し得ないで、其の方面

に押出たとすれば、その時の彼等には眞剣な唯一の道ではなかつたのか。彼等にとつてそれが止むに止まれぬ道として、行かずには居られなかつた方向であるならば、眞實に生きんとする努力の歩みではなからうか。この弱い歩みこそ、正しい「一筋の白き道へ」踏み出し得る力を恵まれてゐるのであらう。

私は五濁惡世の現代に於ては、弱いものが常に正しく、正しい力は常に誤つた強者のために虐げられてゐるのだと思ふ。而してその所謂強者なるものが、何かの機縁に觸れて弱者の正しい力に感激する時、すべての事がらを抛つてその前に平伏するのであらうと思ふ。しかも眞實に生きることは、私たちの人生に許されたことであらうか。

嘗てある外國雜誌で、興味深い一つの話を讀んだことがある。

ある美術學校の生徒が三人で、一つの油繪を畫かうとして、一人の裸體美人を寫生してをつた。甲も乙も丙も各自獨特の技巧と、その個有の觀察とを以て、各獨自の力ある一枚づゝの繪をかき上げた。出來上つた各の繪を互に比較して見ると、三人の繪はどれもこれも各自が別人をモデルにして畫いたやうな趣が畫面に現れてゐた。三人は驚き且つ失望した。

然るにこの事實を見たその學校の教授は、非常に之を稱讚して、各生の性格が其の繪に明かに表はれてゐることを認めたといふのである。

然るにこの教授のこの批評を聽いた三人の中の甲生は、世の中を非常に淋しく感じ出した。即ち、一人の美人を見るにしても、決してお互が同一には見てゐないで、これほど相違するとすれば、人の

氣の毒だといふことや、或は又、同情だとか、同感だとかいふことは、少しも力あることでもなければ、あてになることでもない、痛感したのであつた。言を換へて言へば、世の中の人は皆誤解しあつてゐる。よし、よく理解するとしても、それは自己を中心としての諒解であつて、この廣い世界の中に誰一人已れを眞實に知つて呉れる人はないのである。淋しいことであると感じたのであつた。

ほんの一つの小話には過ぎないけれど、私は實に味のある話であると思ふ。粗雑な、いゝかげんの考へ方をして我身や世の中を眺めてゐる時は、この深刻な淋しさを知ることとは出來ないが、しかしそれは外界の形式に引きずられて行く、内部の空虚な生活であらう。虚偽虚飾の生活であらう。人生の眞實に觸れない生活であらう。嚴密に己れといふものを考へて見ると、私たちには、人を眞實に知り

得る力は與へられてゐないのである。同時に、私達がどんなに苦しみ、どんなに悶え悩んでも其の心身の苦しさを人に眞實の理解を求むることは不可能なことであらうと思ふ。

この苦しさ切なさを酒とか、女とか、金とか、名とか、利とかでまぎらし、胡摩化して行ける間はまだよいが、如何なるものを持つて來ても胡摩化することの出來なくなつた本當の苦しさを、本當の淋しさが私だちの胸の底深く喰込んで、泣くにも泣かれぬこの事實をどうするか。己れの周圍の一切のものに断ちがたき愛執を感じるこの人懐かしい心の悩みをどうするか。かくて私だちは苦惱の子として、與へられたる一生を苦しみ悶えて行かねばならぬのであらうか。寸時の慰安も恵まれないのであらうか。

口傳鈔の第四章に

上人(親鸞)仰にのたまはく、「某はまたく善も欲しからず、また惡も恐れなし。善の欲しからざる故は彌陀の本願を信受するに勝れる善なき故に。惡の恐れなきといふは彌陀の本願をさまたぐる惡なき故に。然るに世の人皆謂へらく、「善根を具足せずんばたとひ念佛すといふとも往生すべからず」と、また「たとひ念佛すといふとも惡業深重ならば往生すべからず」と、このおもひ共に甚だ然るべからず。もし惡業を意に任せてとゞめ善根を思の儘にそなへて生死を出離し淨土に往生すべくは、あながちに本願を信知せずとも何の不足かあらん。そのこと孰れも意に任せざるによりて、惡業をば恐れながらすなはち起し、善根をばあらませども得ること能はざる凡夫なり。かゝる淺間しき三毒具足の惡機としてわれと出離に途絶えたる機を攝取したまはん爲の五劫思惟の本願なるが故

に、たゞ仰ぎて佛智を信受するに如かず。然るに善機の念佛するをば決定往生とおもひ、悪人の念佛するをば往生不定とうたがふ。本願の規模こゝに失し、自身の悪機たることを知らざるによる。おほよそ凡夫引接の無縁の慈悲をもて修因感果したまへる別願所成の報佛、報土へ五乘齊しく入ることは、諸佛未だ發さざる超世不思議の願なれば、たとひ讀誦大乘、解第一義の善機たりといふとも、己が生得の善ばかりをもて其の土に往生することかなふべからず、また悪業はもとより諸の佛法に捨てらるゝ所なれば、悪機また惡を募として其の土へのぞむべきにあらず。しかれば機に生れつきたる善惡の二つ報土往生の得ともならず、失ともならざる條勿論なり。

と。

この現世に於ては、私だちは眞實に生きて行かうとして、眞實に生きて行くことを許されてゐない。否、許されてゐないのでなく、眞實の生を營むことが出来ない前業に依つて生み出だされてゐるのである。この一生を悶え、苦しむのみであつて、しかも寸時の慰安も恵まれてゐないのではなくて、悶え苦しまなければならぬやうな現世の制約を己れ自身の過去に於て作つて來た前業の結果なのである。これを業の繫縛の中にあるといふのである。

私だちは久遠の昔より間斷なく作り來れる業によつて、常に自己の惱みを創造し、而して今日に及んでゐるのである。故に現在の私だちは過去に於ける業の力に作用せられて、時々刻々に新しい業を生み付けながら、果てしなき輪廻の因を形成しつゝあるのである。

この有様を我が親鸞聖人は歎異鈔の第十三章に

善き心のおこるも宿業の催す故なり。悪事の思はせらるゝも悪業の計ふ故なり。故聖人の仰には「兎の毛羊の毛の端にゐる塵ばかりも造る罪の宿業にあらずといふことなしと知るべし」と候びき。と、仰せられたと記されてをることとは、正にこの意味であらう。

しかし、私だちは一業の滅びては、また起る業の活動が餘りに力強いことゝ、自分が作成しつゝある業の道程が、如何に罪に絡まつた、又如何に暗い方面に展開されて行くのであるかとは、全く無關心であり勝ちである。かくしてもがいてゐる私だちの業の道程の真中に生ひ茂り、はびこつてをるすべての毒草が、鋭い刺や、針を以て、私だちの體を毒し傷けてゐるのも知らずに、偽善、猜忌の諸動物が手足にからみついてゐて私だちの肉を食んでゐるのにも氣付かないで、日々の生活を送つてゐるのである。かゝるむごたらしい業

道の流轉と、惱みに悶える無智の私だちが存するが爲に、如來の「偉大なる慈悲即ち絶大愛」が發動したのである。これが本願力となつて表はれ、念佛にまで完成されたのである。換言すれば、如來の誓願を解こされた絶大の意志が完成されて、こゝに念佛と成就したのである。この大願業力によつて成立つた如來の慈光に接しては、私だちの業は全く其の價值と力とを失うて、只如來の願力不思議を讚する外何物をもあり得ないのである。こゝを前に記した口傳鈔の同章には、

さればこの善惡の機の上にたもつ所の彌陀の佛智を慕とせんよ
り他は凡夫いかでか往生の得分あるべきや。さればこそ「惡も恐ろしからず」ともいひ「善も欲しからず」とはいへと。こゝをもて、光明寺の大師（善導）言弘願者如大經說、一切善惡凡夫得生者、莫不皆乘

阿彌陀佛、大願業力無増上縁也とのたまへり。文の意は、弘願といふは大經の説の如し、一切善惡凡失の生るゝことを得るは皆阿彌陀佛の大願業力に乗りて増上縁と爲ざるは莫しとなり。されば宿善厚き人は今生に善をこのみ惡をおそる。宿惡重き者は今生に惡をこのみ善にうとし、たゞ善惡の二つをば過去の因にまかせ、往生の大益をば如來の他力にまかせて、嘗て機の善き惡しきに目をかけて往生の得否を定むべからずとなり。

と説明せられてをる。
一切を許し、一切を認め、あるがまゝに抱擁されてをる私たちが、何を惱む必要があらう。歎異鈔の後序に書かれてをる、

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は萬の事みなもて虚事、戲事、眞實あることなきに、たゞ念佛のみぞまことにて在します。

と我が聖人が高調された意味あひが、おぼろげながら私だちのこゝろの中にしみこまずにはおられないのである。この心もちで御和讃を拜誦する時涙ぐましい心にならずにはをられない。

極惡深重の衆生は

他の方便さらになし

ひとへに彌陀を稱してぞ 淨土に生るとのべたまふ。

縱令一生造惡の

凡夫引接のためにとて

稱我名字と願じつゝ

若不生者と誓ひたり。

本願力にあひぬれば
功德の寶海みちみちて

むなしくすぐるひとぞなき
煩惱の濁水へだてなし。

佛法力の不思議には
彌陀の本弘誓願の

諸邪業繫さはらねば
増上縁となづけたり。

願力無窮にましませば
佛智無邊にましませば

罪業深重もおもからず
散亂放逸もすてられず

無碍光の利益より
必ず煩惱の水どけ

威徳廣大の信を得て
すなはち菩提の水となる。

罪障功徳の體となる
水おほきに水多し

氷と水のごとくにて
障おほきに徳おほし。

本願圓頓一乘は
煩惱菩提體無二と

逆惡攝すと信知して
すみやかにとくさとらしむ。

道理も知らぬ、理窟も知らぬ。たゞ何となく大きな力に觸るゝ心地がする。どこからとなく微妙な響の胸にしみ入るやうな心地がある。力が湧く。これが私の救はれてゆくたゞ一筋の白き道である。私に恵まれた唯一の救済道である。私一人に恵まれた唯一の救済道は、同時に凡ての人が救はれて行くべき道であることを信ずるのである。

然し、私には人を知る明などがあらう筈がない。眞實に人を知る力は更にないのである。かういふ無力な私が救はれたからとて、我の身の如く、他の同胞たちも同じやうに救はれて行くと斷すること

は、潜越であり、甚だ不合理のやうであるけれども、私はさう信せざるを得ないのである。

私の力がさう信するのではなく、如來の本願力を通してさう信せずには居られないのである。

それは永劫の間流轉して來た私の個性、即ち私の罪業を其のまゝに認めて、無限の慈悲を垂れたまうた如來は、また私と同じやうな罪業に惱む同胞の各の個性をそのまゝに如實に認めたまふことを信せずにはをられないからである。

阿彌陀經、正宗分に

又舍利弗、極樂國土、有七寶池、八功德水、充滿其中、池底純以、金沙布地、四邊階道、金剛瑠璃、玻瓈合成、上有樓閣、亦以金銀瑠璃、玻瓈磈磈、赤珠碼碯、而嚴飾之、池中蓮華、大如輪車、

青色青光、黃色黃光、赤色赤光、自色白光、微妙香潔。

とある。その意は、

また舍利弗よ。極樂國には、七寶を以て飾りたる池があつて、其の中には八功德水(甘、冷、軟、輕、清淨、不臭、飲時不損喉、飲已不傷腸の八徳を具へたる水)が湛然と満ちて居る。其の池の底には、金の沙が布きつめてある。而して東南西北どちらへも自由に往來が出来るやうに、池の中から岸の上へ階段を架け、岸の上には道が出来て居る。其の階段や道はすべて、金、銀、瑠璃、玻瓈の四寶で美麗に成て居るのである。岸の上には、樓閣があつて、金、銀、瑠璃、玻瓈、磈磈、赤珠(赤眞珠)、碼碯の七寶を以て、まばゆく飾り立てゝある。池の中には大きき車の輪ほどもある蓮華が開いて居て、其の花の青色のには青光があり、黄色のには黃光

があり、赤色には赤光があり、白色には白光があり、その香の芳しいこと又奇麗なこと、とても言葉を以て言ひ盡されぬ趣があるのである。

(伊藤精次氏の和譯による)

といふのである。

阿彌陀經のこの極樂の解を、私は、私だちの醜い個性をその儘に認めて、それぞれの價値を與へらるゝこと共にすべてのものを純化し、自由にせずには止まない如來のありがたい願力と拜したいのである。極樂の莊嚴は、一つ一つ如來願心の莊嚴しますところであつて、依正不二の妙境界であるとのことである。されば、寶池に咲き揃うてをるところの蓮華は、其の一つ一つが如來願心の表現であつて、その一つ一つの花の光は大慈悲心の具象化の無碍なる有様

を示された御言葉であると窺はれるのである。青色には青光があり、黄色には黄光があり、赤色には赤光があり、白色には白光があるとある。如來の願力は、私だち個性をその儘うけとつてそれ自身價値あらしめるのである。青色を變じて赤色となし、黄色を變じて青色となし、赤色を變じて白色となし、白色を變じて赤色となして行くのではないのである。赤は赤のまゝ、青は青のまゝ、うけ入れて慈光に淨化して下さるのである。人間の世に於てこそ慾望が惡となつてはたらく、しかし如來の光の前には善惡はない。故に慾望に満ちてをるそのまゝを色もかへず淨化して下さるのである。かう考へ來る時、寶池の蓮華は大慈大悲の御光と仰がれるのである。

この心を親鸞聖人は御和讃に

一一のはなのなかよりは 三十六百千億の

光明てらしてほがらかに いたらぬところはさらになし、

一一のはなのなかよりは 三十六百千億の

佛身もひかりもひとしくて 相好金山のごとくなり。

相好ごとに百千の ひかりを十方にはなちてぞ

つねに妙法ときひろめ 衆生を佛道にいたらしむる。

と讃仰されてゐる。

この和讃のこゝろと、阿彌陀經にある青色には青光、黄色には黄光、赤色には赤光、白色には白光あり。微妙香潔なりとの意味を、私は、ものそのもの性質によつて與へられてある其の特色を其のまゝに認められて行く、大悲の大みこゝろであると解したい。即ち、私は、AはAとして愛し、BはBとして認むるとの仰であると拜したいのである。諸佛は諸佛として認め、聖者は聖者として許し、凡

夫は凡夫としてそのまゝで愛するとの大慈悲である。換言すれば、甲は甲として理解すると同様に、乙は乙として如實に理解するとの悲心がある。甲を乙にかへてうけ入れるといふのではないのである。なほわかり易く言へば、如何なる個性でも、その個性のまゝうけ入れてこれを淨化せんとする大願力なのである。

これを親鸞聖人は、如來は我等凡夫の一一を夫れ夫れ愛すべき敬すべきものとして、それぞれの價值と光とを認めたまふと如來の願力を慶讚されたのではなからうか。これを内面的即ち心的に解釋すること許さるゝならば、私だちの心の中に起る種々なる心の色、即ち三毒の煩惱、所謂喜、怒、愛、樂、哀、憎、惡などといふいろいろ様々の色をなし形をなして變化極りなき醜態を示すともすべての場所、すべての時、汝等凡夫を常に思ひ、常に愛するが故に、變

化其のまゝを認めて、これを純化せずにはおかないとの仰せである。これは、絶大なる大慈悲心と、すべてのものを攝取して捨てたまはぬ絶対抱擁の力を有し給ふ如來ならでは、なす能はぬ佛智不思議の願力である。

相対的な小さな牢屋のやうな世界に住んで、妄想に囚はれてをる私たちは、殆んど諒解することすら出来ない絶大なる妙境である。

しかしながら靜かに如來の願力の不思議を仰ぐ時、凡夫の私だちの間にも、願力の顯現によつて、凡夫のまゝに調和された世界の展開を拜することもあらう。

倉田百三氏の「出家とその弟子」の第一幕の中に、

左衛門「若しあなた方にあやまる機會がなくて、あれ限りになつてしまつたら、あなた方がいつまでも呪ひを解かずに巡禮してい

らしたなら、私のつくつた悪はいつまでも消えずに嚴かに残るにちがひないといふ氣がしました。また私は生きた鶏を屠す時にいつも感じます。此の様なことが報わなくて済むものかと。私はあなたを打つことを思ふと、どうぞ私を打つて下さいといひたい氣がします。」

親鸞「私は地獄がなければならぬと思ひます。その時に、同時に必ずその地獄から免れる道がなくてはならぬと思ふのです。それだけでなくは此の世界が嘘だといふ氣がするのです。此の存在が成り立たないといふ氣がするのです。私だちは生まれてゐる。そして此の世界は存在してゐる。それならその世界は調和したものでなくてはならない。何處かで救はれてゐるものでなくてはならない。といふ氣がするのです。私だちが自分は悪かつた

と悔いてゐる時の心持の中には何處かに地獄ならぬ感じが含まれてゐないでせうか。かうしてみんな爐を圍んで泌々と話してゐる。前には争うたのも、今は互に許し合つてゐる。何だか涙ぐまれるやうな心地がする。何處かに極樂が無ければならぬやうな氣がするではありませんか。」

左衛門「私も其の様な氣もするのです。けれども其の様な心持ちは直きに亂されて仕舞ひます。一つの出来事に當れば直ぐに變ります。そして私の心の中には依然として、憎みや怒りが勝を占めます。そして地獄を證するやうな感情ばかり満ちます。」

親鸞「私も其の通りです。それが人間の心の實相です。人の心は刺激に依つて變じます。昔の聖者はそれを『定散の凡夫』と仰せられました。私だちの心は風の前の木の葉の如く散り易いもので

す。」

といふ、日野左衛門と親鸞聖人との對話とが書かれてゐる。「出家とその弟子」に書きあらはされた親鸞聖人は、倉田百三氏の思想によつて描き出だされた親鸞聖人であることはいふまでもないが、こゝに描出した思想や、場面の事實は私だちの住む世界に於てもあり得る事實であつて、これを私は如來の善巧攝化の顯現と拜したのである。

之を私だちの肉體によつて感知することが出来はしまいか。私だちの肉體は無数の細胞によつて組織されてをると、近代の科學は私だちに教へる。その細胞の一つ一つが個々別々の生物であることは疑ふことの出来ない事實である。其の命ある個々の細胞を、この細胞はその細胞よりも特に大切な細胞であると偏愛しないことは勿論

であつて、其の細胞の集合によつて一つの體をなしてをる手や足を、少しも偏愛する心のおこらないのは不思議である。それは身體全部として調和し完成してをるからであらう。而かも手は手として、足を足として、自己の生存の上に一時も缺くべからざるものとして尊重してゐるのである。

この心は、如來の絶對愛即ち大慈悲心に類した一小部分ではあるまいか。今より三千年以前に於て、大聖釋迦牟尼如來が幾多の修行の後、成道せられた時、思はず、「奇哉、奇哉、一切衆生悉有佛性」と呼ばれて、驚歎されたとき、及んでゐる。が、罪業深き私たちの身體にも、又、無意識であつたとはいへ、既に恵まれたるこの尊い佛性即ち眞實性の顯現しつゝあることを喜ばずにはゐられないのである。

この恵まれた心を以て、その周圍を見れば、山は我が爲に高く聳え、川は我が爲に緩く長く流れ、木や草や皆我が爲に赤き白き花を開く。宇宙間の事々物々皆悉く我れ一個の爲に微妙の相を現し、變化の妙を極めてゐる。これみな我れ一個の爲の佛心の顯現ではないか。

無量壽經に

無量壽佛、放大光明、普照一切、諸佛世界、金剛圍山、須彌山王、大小諸山、一切諸有、皆同一色、譬如劫水、彌滿世界、其中萬物、沈沒不現、混漾浩汗、唯見大水、被佛光明、亦復如是、聲聞菩薩、一切光明、皆悉隱蔽、唯見佛光、明曜顯赫。
とある。

無量壽佛は大光明を放ちて、普く一切諸佛の世界を照らし給ひ、

金剛鐵圍山や須彌山などの山々を初とし、大小の諸山、十方世界の萬物、皆悉く平等の金色となりました。之を誓へて言へば、劫水が世界に漲つて、萬物其の中に沈んで一物も見えず、唯浩浩として浪のうねる一面の大水を見るやうであります。彼の無量壽佛の大光明も亦復その通りで、聲聞菩薩其の他一切の光明は、皆悉く隠蔽されて、唯無量壽佛の光明の、明に耀やき渡るを見上るばかりであります。

(伊藤精次氏の和譯による。)

といふ意味である。

私だちの住んでをる世界にも、月の光があり、星の光があり、電燈の光がある。されど是等は皆太陽の光の分派ではないか。夜一たび明けて、東天明光を放つ時、すべてこれ等の小光は光を失つてし

まふのである。

三世には三世の諸佛いまし、十方には十方の諸佛がいます。而して諸佛各その光明を放つてをるけれど、一度如來の光明に攝取せらるゝ時には、皆一樣な光となつて融合せらるゝであらう。

この大光明に一度遇ひたてまつることを得れば、空しく過ぐる者はなからう。

否、この大光明こそは、己れ一人の爲の大光明であつたのである。若存若亡のこの身を以てこの大光明に觸れさしていたゞくことは尊いきはみである。

あゝ、

遇無空過者。

三、日月清明。

(一) 自然のいのち。

自然といふものは、そのどんな小さな一片を取つてみても無限の大いさが漲つておるやうに思はれる。道端に咲いてゐる一本の莖にも一莖の野菊の花に見ても、その微妙な組織や構造は、生物學者が如何に研究してみても研究し盡せないものがあらふ。又其の美しさや奇麗さは古來幾萬の人が歌や句に詠つても詠ひ盡せないものがある。この小さな莖の命や、この野菊の小さな命は、宇宙の根底をなしてゐる大きな生命に繋がつてゐる。その大きな命の發露として、こゝに花をつけてゐる、莖の花の一つ、野菊の花の一つ、その形は

有限な小さなものであるけれども、その生命は無限に大きなものである。而してこの無限の大きさを見る事が出来、知ることが出来、信ずることが出来るものにして、初めて宗教の世界に入る事が出来る、信仰の世界に住むことが出来るのである。

自然にあるものは、即ちこの世に存するものは、どんな物でもみな無常なものであるが、無常は無常に終らずして、無常に即して不朽がある。若葉は青葉となり、紅葉となり、落葉となつてしまふ、けれども、土に歸した落葉はそこで其の質を還元して、其の根から、又其の木の脈に通つて行く。現象は無常であるけれども、其の本質は不朽であらふ。吾人は如何にしても自然にあるものゝ本質を滅してしまふこと不可能である。木の葉を滅ぼさうとして焼いてしまつても、それは木の葉を灰に變形せしめたにすぎないので、木の葉の

本質は元素に分解されてそこに残るのである。時あつて或縁に觸れば再び新しい形のものに生れ變る。この事は單に物理、化學界の原則であるのみでなくして精神界の事に對しても亦事實であらふ。人の魂は死と言ふ事實に依て滅ぼされない。即ち自己が作つた業は自己の體が死の事實によつて離散しても其の行作の力は永久に死ぬる事はない。滅ぼされることはない。其の力は他の新しい魂を呼び覺ます。吾人の心の中に過去の人の心や、過去に於ける私の心が蘇つてをり、又吾人の心が將來の人の心の中に否な將來の私の心の中に生きる。斯くして吾人は業の繫縛を一步も外へ出る事は出來ない。輪廻は自れの三世を通じての姿であらふ。繰返して言ふ。現象は無常である、が、本質は不朽である。この不朽なる本質と自然のいのちとを看取しなければならぬ。而して、この不朽の尊さに觸れ得

る人にして、初めて宗教に入る事が出來、信仰に入る事が出來て、み佛の慈悲を仰ぎ知る事が出來るのである。

自然に存する萬物はみな大きな調和をなしてゐる。凡てのものが凡てのものと聯關してゐる。地上にあつて孤立したものは一つもない。廣い野の中を飛ぶ淋しい一つの蝶でも孤立はしてゐない。彼の飛ぶ所のどこかには甘い蜜を堪えた花があつて彼れを待つてゐる。花は蝶によつて其の花粉を運んで貰はなくはならないのである。又、木は小鳥のために止り木として枝を張つてゐる。時として暖かさうな葉をつけてゐる。是は審美學で言ふ調和美といふやうな外觀的のものでなく、内在的な力が倚り合ひ扶け合つて、一つの渾然たる世界を形成してゐるのである。地上にあるもので不調和なものは一つもあり得ない。若しこの地上からどんな一つの物でも全然取り

除いてしまつたなら、生きた毛一本を抜かれる肉體のやうに、大きな自然は痛みを感ずるであらふ。それ程自然は有機的の調和をなしてゐる。然し、こゝに私が言ひたいことは、自然は今あるがまゝの調和を以て休止してゐるのではないことである。更に更に完全なる調和、全圓的なる調和を求めて暫くも休まないことである。

この事は天然界に於ては、所謂進化の課程となつて現れるが、殊に自然の最高頂點を示す人生に於ては大きな動搖の波を恒に起してゐる。この人生の動亂を、一見平靜な静寂に近い天然界に比較して不調和と見ることは誤りであらふ。若し天然界が靜的調和に近いと言ひ得るなら、人生は動的の調和であると言ひ得るであらう。こゝには調和の形式ではなく、即ち既成の調和ではなく、調和を作り、調和を産む所の精神、言葉を換へて言へば調和の方能、其の物が吾

人の魂に恵まれて働いてゐるのである。吾人はこの大きな方能の根源を如來のみ心に見出すのである。如來の願力とは是れであらう。如來の本願とは是れであらう。この願力、この本願に吾人の魂が目覺さるゝとき一切のものゝすべてがみ佛のこの慈悲の中にあることを氣付くのである。世上一切の所有現象が轉變しつゝある中にこの力と力との調和即ちみ佛の慈悲が煌として實現されつゝある。吾人はこの慈光に浴してみ佛のみ心に觸れなくてはならない。

自然にある物のどの一つをとつて見ても、それには自然全體の綜合せられた相がある。自然の大きな空間及び長い時間の總和に依つて出來た結果にあらざるものはない。今、一個の林檎に付いて考へて見ても、その木に適した氣候と土と雨水と太陽の光とが結晶してこの美はしい。旨い果物を作つたのではないか。又、此の立派な種

類を得るまでに幾代の長い早月を要して、樹質の改良が工夫せられたことであらうか。又是を栽培した人の勞力と智恵といふものも除いて考へる事は出来ない。又、私が今是を味ひ得るのは之れを採取した北國から爰まで運んで來た汽車があるからで、この運搬機關を作るまでに到つた文明といふ事をも考に加へるならば、それからそれと際限もなく絲が絲を引いてゐる。たつた一つの林檎にも自然全體の綜合せられた相がある。又、私の傍にある鐵瓶を見ても、此鐵瓶が深山から採掘せられるまでの人間の勞力と是に要する装置や、機械、火を精製し鑄込む爲めの職工の技能と是に伴ふ意匠や、趣味、爰にも尙工業界の發達や風俗習慣といふものゝ總和が示されてゐる。かう見るのは決して思索の遊戲ではない。例へば擴げられた網の一つ一つの結び目がそれそれに全體の綜合だといふ事を、理窟からで

なしに直感として言ひ得る如きものである。又、動物の骨の一片を學者に示したならば、其は何といふ動物のごとの骨だといふ事を言ひ當て得ると同じである。一つの有機體としての動物の肉體は其の何の部分にも、全身の特徴をもつてゐる。其の様に自然全體がさうである。吾人が平生體驗する自然は、時間にも空間にも極めて限られた範圍にすぎないけれども、其を以て我々は全體としての自然を應ずる事が出来る。自然の大きな力と自然の深い愛とを感ずる事が出来る、即ちみ佛の偉大なる力とみ佛の無限なる慈悲とに感泣せざるを得ないのである。吾人が外的に見れば貧弱な日常經驗から、身邊平凡の事柄からことごとくみ佛の慈悲に感謝し、懺悔することの盡きざる所以は茲にあるのである。

(二) 環境に導かれて

人が他の動物よりも勝れてをる所は多々あるであらう、然しながら、人が人として最價値のある所は、考へること即ち思想を有してをるといふこと、いま一つは智識を備へてをるといふことであると思ふ。他の動物と雖も皆それ相當に智識を持つてはるよう、然しながら、それ等は人間の智識といふものに對して、殆んど比較にならないものである。この意味に於て私は如何なる人間も凡べて勉強家であり、思想家であり得ると言ひたいのである。然し、かう言つたからとて、人はすべて書齋に閉籠つて、體を曲げて書物を視て居なくてならぬといふのではない。譬へば、茲に書物が書かれたとすれば、その人はその書物をかくといふ勉強の前に、十分に考へたので

ある。偉大なる思想家の或人々は、決して書齋といふやうな窮屈なものの中に閉籠つた人ばかりではない。人きな自然の姿、すぐれた彫刻、活きた社會、個人々々の生きて行く姿、目に觸れ、耳に響く是等の凡べては、皆思想に對する絶えざる好題目を表示してをるのである。是等の題目を捕へて、其等の起り來るところの原因を詳かにし其の結果を窮めんが爲に、あらゆる力を集注し、而して精練し研査するところの人が、即ち勉強家であり、思想家であり、哲學者であり、而して又最も價値ある人なのである。

人は、かくしてこそ人としてこの世に生れ出でた甲斐もあり、又、人たるの眞の價値を示すことが出来るのであるのみならず、其處に眞の意味に於て、人間の安心をも得ることが出来るのである。故にこの見地から吾々は思想家とか哲學者とかいふ稱號を、或る専門的

な學者にのみ與ふることを止めねばならぬと思ふ。今や、しかく偏狹的に見ることは断じて避くべき時代ではあるまいか。茲に熱心に誠意を以つて眞理を探究しようとする人があるならば、時代と方法の如何を問はず、その人は智識階級の最も尊むべき人であらねばならぬ。

「考へる」といふ語の意味を、最も廣義に解釋するならば、すべての人々は誰も常に考へてをるものであると言ふことが出来ようと思ふ。なほ換言すれば私達の存在は私達が「考へて」ゐることにあると思ふのである。即ち私達人間の心は朝から晩まで理想や觀念の連続で成立つてをるのである。

然しながら、是等の觀念の連続が受動的で、其處に何等の定見もなく、唯偶然とか、或は外部からの衝動とかに依つてのみ支配せられ、動かせられて行くものだとすれば、それは覺めてをる時間の間、外界からの刺戟とか壓迫とか言ふものに依つて動かされて行く他の動物の生活と何等著しき相異のない限り、人としての價值あるところを眞に知ることが出来ないのである。而してかくの如きものをも思想と呼び得るならば、即ち、何等の目的をも持たないところの考へをも思想と呼び得るならば、かゝる思想は全く無意味無價值なものと言はねばならぬ。恰も晴れ渡つた青空に根もなく浮び出た雲の、風のまにまに動いて處定めずたゞようやうなものであり、又狂人の眼の前にあらはれる幻覺が何等の事實をも含まない幻影であるやうなものである。さういふものを私達は思想として見ることは出来ない。

それならば眞實の意味に於て思想といふのは如何なるものである

か、それは言ふまでもなく智識の力であらねばならぬ。かゝる意味に於ける思想に於て、私達の心は、外部からも、又内部からも、印象とか暗示の上に、反應して心の注意を集注し、非常なる力を以て印象や暗示を解剖點檢し、恰も實驗室に於て、物體を個々に解體し、又それを綜合するが如く、それ等を分拆し、而して後それ等を新に組立て、以て個々の間に行はれ力づけられてをる關係即ち原因、結果の整然たる成行を見て、一つのものゝ生すべき爲に起るすべてのものをよく考へ、而して之を最後に一つに纏めるといふことが、思想の眞の意味である。

吾人々類が生活して行くこの世界は、明に今述べて來たやうな意味に於ての思想を起こさしめるやうに促進してをるやうに感せられるのである、而してかやうに凡ての事物を究めて行くと言ふことは、

頗る難義な神祕な力に満ちてをることではあるが、智識の集注といふことに依つてのみ、この鐵壁に突進し、且つそれを解體し得ることが出来るのである。吾人の住するこの自然界或は社會に於て、最も單純に見えるところの各々の事象も、亦人生に於ける各事件も、皆單獨で殘存するものとは一つもなく、それ等は巧に綜合組織せられた種々なる個體若しくは元素に依つて成立してをるのである。而して是等の個體や、元素の作用を明に理解せんが爲には、其の複雑な復合體から、先づ個體に分拆し、而して元素にまで還元しなくてはならぬ。かくて、各元素の間に、又は各個體の間に行はれてをる原因結果の關係を仔細に吟味して見なくてはならぬ。而してこれで凡ての手續が終了したのではない、私達の心の中に映じてきたすべての事柄は心そのものが難解なものゝ集合であると同時に、そ

の心にあるもの、映すること、に依つて起る心の複雑なる作用は、すべての他のものに結び付いてをる聯合作用であることに氣付かなくてはならぬ。宇宙の姿は、不秩序な滅茶苦茶な積重ねに依つて生み出されてをるものではなくして、而も完全な綜合統一をなしてをる。美はしい結合體なのである、と同様に、私達の心も亦變現出沒捕捉し難いやう見えるけれど、それも何物かに依つて綜合統一せられてをる尊いものであることを忘れてはならぬのである。

一體、この世の中に存在するものには、たゞ單純に存在してゐるものは一つもないのであつて、すべてのものは相互に關連してをるのである、故に一つ一つの個體はすべてのものゝ爲に存在し、すべてのものは、又一つ一つの個體の爲に存在してをるのである。かくの如き密接なる關係によつて成立してをる宇宙は、かくの如き意味

をよく理解するやうに、私達に要求してをるのである。草が美しい花を咲かすのにも、木が麗はしい芽を出すのにも、實を結ばしめるのにも、蜘蛛が細美なる巢を張るのにも、鳥が麗はしき聲に歌ふのにも、或は、馬があえぎながら苦しんで大八車をひきながら急坂を登つて行くのにも、人が生れて、苦しんで、而して死んで行くのにも、皆その理法の原理を啓示してをるのである。私達人間は、これ等の事相に對して考へねばならぬやうに置かれてある、私達人間は考へる力がある、私達人間には智識がある、即ち是等の事相に對して内部の力を捻出せねばならぬやうにされてをるのである。徒に事象の表面のみを眺めずに、深く其奥に突入つて、事の起り來つた原因とその結果との過程を究め、相互の影響や、それ等の間の不同と類似、又それ等の間の釣合と調和、而して又それ等の綜合統一し

てをるところの一般的理法を理解するやうに生み出されてをるのである。

私が「人は考へなくてはならぬ」と言はうとする意味は實にこゝに在るのである。人と生れた吾々人間は皆ものごとを考へ得るところの可能性を有してをるのであるから、私達人間は淺深の差こそあれ、皆或る程度に於て之を實行して來たのである。かの小兒を見よ、彼等は父母から與へられた新しい玩具に驚異の目を見はり、其玩具の動く力の源を究めん爲には、惜し氣もなくそれをこまごまに碎くのである。

こゝに吾々人類が惠まれてをる力が赤裸々に露されてをるではないか、これこそ哲學者たるべき萌芽でなくてはならぬ。未知の世界に突進せんとする初めであり、思想の成體や調和を採らんとするの

初めである。

故に是等小兒がなすところのものを或意味に於て助長せしめ、而して彼等が彼等の胸に於て、又は社會に於て、或ひは外界の自然界に於て、目撃したところの個體や、關係や、理法を探求することを彼等の生涯に於ける一大職業となさしめたならば、彼等の境遇が譬へ如何なるものであらうとも、彼等は思想の自由力とに對し、又自然界の廣さとその統合とに對し、一步一步と進み行くであらう、是が彼等が生み出された彼等の内部的啓示とも、偉大なる智的理想ともなるのであらうと思ふ。

こゝに私は、大聖釋尊のこの世への出現を思ひ、法然聖人の淨土宗の開示を思ひ、親鸞聖人の凡夫往生を思ふのである。而も、是等の聖人哲人達の出現と、私達の生みだされたこの状態とを、無關心

に見遇してしまふ譯には行かぬのである。前にも言つたやうにこの世のものは個々單純に存在する如く見えるが、事實は決してそうではなくして、各々深い關連を持つてをるのである。

私一個の存在のためにすべてのものが存在するのであるならば、先づ是等聖人の出現と私一個の存在に就いての關係を考へ、且つそれを究めなくてはならぬ。こゝに氣付いた私達が「歎異鈔」の「後序」にある。

聖人(親鸞)のつねのおほせには彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人が爲なりけり、されば、そくばくの業をもちける身にしありけるを助けんと思召したちける本願のかたじけなさよと御述懐さふらひしことを、今また案ずるに善導の「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に流轉して出離の縁あることなき身と知れ」といふ金言にすこしも違は

せおはしまさず。

と、あるお言葉を讀む時に、如何に鋭き自己に對する批判であつたかを思はずにおもれないのである。かゝる聖人であればこそ我等凡愚の救はゆく道の體驗者として出現されたのであることを信ぜざるを得ないのである。

(三) 漲れる慈光に浴して

自然といふ言葉は、随分久しく、そして随分多く用ひられてゐる。自然は空間と共に無限に擴がり、時間と共に悠久に連つてゐるのだから、この言葉が古くから用ひられてゐるのは當然であり、又、到る處で用ひられてゐるのも當然である。

然し人々は、此の言葉を眞に解して用ひてゐるのであらうか。眞に自然そのものを見、自然のその心を感じてゐるのであらうか。空氣といふものが、餘りに普遍的であるが爲に、昔の人々は、空氣といふ觀念を全く持つてゐなかつたやうに、多くの人々は、自然があまりに普遍的であるが爲に、自然の尊さを全く感じてゐないのではあるまいか。

言葉を換へて言へば、み佛の慈悲が、あまりに行きとゞき過ぎてゐる爲に、私どもには、その力、そのありがたさを感じせられずをるのであるまいか。

「自然と人生」といふ成句がある。

然しながら、自然に對しての人生、人生に對しての自然と、かう對立的に見た心持からは、眞實の意味に於ける自然を感じることは出来ない。自然を人生の外にあるやうに考へるならば、言ひ換へれば、自然を人生といふ舞臺の背景のやうに見るならば、自然といふものは、單に靜止した固定した平面的な繪畫に過ぎない。それは自然を見てゐるのではなく、その影像を見てゐるに過ぎない。眞の自然の、嚴肅な、堅實な、平等的な自然の眞像から投射された影に過ぎないのである。多くの人々はこの影を見て、自然と名付けてゐる。

而して自然の本體を顧みようとはしない。

眞の自然は私たちの人生を支へてゐるものである。自然は大地である。人生は塔である。塔に見られる莊嚴は、土地そのもの、精魂である。人生の塔が、危うげもなく立ち得る爲には、自然の大地に深く根ざしてゐなければならぬのである。

「自然に歸れ」といふ語がある。

この語の意味する心は、何れの時代にもよい教となるであらうが、一體、私たちはあらためて自然に歸ることを必要とするほど、自然から離れたことがあるであらうか。私たちが自然から離れてゐると思つてゐる間も、自然は大きな愛を以て、私たちを載せてゐるのではないか。私たちが自然の外に踏み出してゐたのではない。たゞ自然の上でありながら、自然に面を背けてゐたゞけなのである。

であるから、「自然に歸れ」といふよりも、寧ろ「自然に面せよ」「自然を凝視せよ」といふ言葉で足りるのである。

私たちは、自然といふ母の懷に於ける駄々子であつたのである。私たちが我儘勝手をいつて、地團太を踏んであばれてゐる時でも、嘲罵悪口を吐いてゐる時でも、自然の手はしつかりと私たちの脊を抱いてゐたのである。私たちの肉體の中に、母の血が通つてゐるやうに、私たちの精神の中には自然の心が通つてゐるのである。即ち、み佛のお慈悲が滲み込んでゐる。たゞ此の平凡な事實に氣が付きさへすれば、私たちは、常にみ佛の慈悲に感謝して、而して、み佛の心を以て育てられることが出来るのである。

自然に對するものは人生ではない。不自然な概念的形式である。この概念的形式が自然の中に發生し、而して眞の自然を遮るやうに

なつたのである。此の理法に就ては、別に哲學的の考察を要するの
であらうが、卑近に例へていふと、光と熱との作用が、雲の發生を
促し、其の雲が光と熱とを遮るやうなものであらうと思ふ。

自然の上から生じ、自然の上に成長のした人間が、自然の心を開
展せしむべき唯一理想たる人生を創造しつゝある間に、許多の概念
的形式を構造したことは悲しむべきことである。而してその人生が、
所謂文化といふ方面に向かへば、向かふほど、益々概念的形式的尊
重を強ひられる傾になる。さうして、因襲、虚偽、階級といふが如
き、もろもろの不自然なるものが、一生の要素であるが如き觀を呈
して來たのである。

こゝに於てか、自然對人生といふが如き見方も出來て來るのであ
る。

しかし、上に述べたやうに、自然は人生に對立するものではない。
人生の中にある不自然なる要素は、人生の病氣である。この病根を
私たちは除かねばならぬ。私たちはこの病根を確に鑑別し、それを
除いて、健康なる人生を築かなければならない。少なくとも、各自
が人間として健全に生きなくてはならない。

雲の厚さは、如何に厚くとも、光の晝を變じて闇の夜とすること
はない。今日の社會の制度、現代的の生活様式が如何に概念的の形
式に充滿してゐようとも、自然の光が、絶対に私たちに封じられて
ゐるのではない。假令、刹那的であらうとも、世界が創造されたそ
の日のやうな生き生きとした自然の力を、しつくりと自分の心の中
に感ずることがある。私たちがあらためて自然に歸るまでもなく、
私たちは自然から懷かれてゐるのである。み佛に護られてゐるので

ある。自然の腕から温味を我身に感ずるといふことは寧ろ當然であらねばならぬ。如何なる悪人も、やがてみ佛の前に一念發起して懺悔の涙に暮れることが、必然の行路でなくてはならぬ。

この心持——私だちがびたりと自然の核心に觸れた心持——即ちみ佛の慈悲に浴したる時の心持を、私だちは眞實と名付ける。信仰と名ける。

眞實とは我が身に宿つてゐる自然の意識である。信仰とは我が身に宿つてゐるみ佛のみ心である。人間がまことに生き甲斐を感じて生きることは、この眞實即ち信仰に徹して生きること以外ならぬ。古の正しい人々の中には、眞實に徹する生活を求める爲に、不自然な概念的形式に満ちてゐる現實の生活を厭離して、僧侶になつて寺に入つたものもある。一笠一杖、抖擻行脚して雲水に身を委した

ものもある。かうしてこそ、まことの自然に懐かれ、まことの自然に育まれる心持を證得することが出来たのであらう。

これ等の人々の、專念と精進とは實に貴いものである。又、これ等の人々は眞に勇氣のある人であつたともいへる。しかし、これほどの勇氣は、凡ての人に望み得ることは出来ない。否、すべての人々が、かういふ勇者であつたなら、人類の命は、これが爲に阻止せられるに違ひない。又、眞にそれ程の勇氣がないにも拘らず、輕々しく現實の生活から離れたならば、却つて靜止的な固定的な自然の影響を捉へて、之を自然と早呑込をなし、誤解する危険に陥つてしまふ。

一體、この現實生活の中には、幾多の概念的な形式が混入してゐるけれども、その現實生活こそは、自然が進展してこゝに及んだも

のに外ならない。

されば、眞に自然を感じようとするならば、此の現實生活に即して感すべきである。眞實を求むる道は、外にはない、やはり此の現實生活の中に存せねばならぬ。

私たちは、肉體の苦痛や、慾求などの中に、偽る事の出来ない嚴肅な自然の力を感ずるではないか。たゞ多くの場合に、是等、肉體の苦痛や、慾求のいろいろが、不純な分子を混じ易いが爲に、虚偽な生活に導く誘惑となるといふだけである。

されば、如何なる部分が自然であるか、如何なる部分が不自然であるかを、内省し、區別して、以て自然の心を火とし、不自然なる想念を焼き盡すことは、これ亦、眞實を求める道に外ならないではないか。

私は思ふ、眞實を求める道、即ち信仰に入るの道は決して遠くにあるのではない、身邊の近きにあるのであることを。私たちに眞實を求める心さへあるならば、行住座臥いづれか皆その道ならざるはない。

私たちの祖師親鸞聖人が、山より町へ、静寂なる殿堂より繁雜なる家庭へと辿られた平民宗教の過程は、まさにそれである。

聲色を通じても、暑寒を通じても、満足なる心を通じても、困阨なる場合を通じても、喜びを通じても、悲しみを通じても、眞實に觸れることは出来るのである。

さて、私たちにとつて最も大切なるものは、いふまでもなく、命である。この命の動搖の中に、私どもは、自然の動搖を見る。而してこの命を眞實のすがたのまゝに、純粹な本質に於て内感した時、

私どもそこに生命の貴さを感じる。生命の貴さとは魂の自由性である。今日の私どもの生活は、あまりに範疇的である。社會制度といふ樹形の中に箝め込まれて、いつも對外的に必要な衣服裝飾をつけて暮してゐる。それは方便である。しかし私たちは、この方便に囚はれ勝ちである。方便に囚はれて偽らない貴い生活を忘れてはならない。私たちは社會人たるにも、自由人として、自然人として生きることを忘れてはならない。

又、生命の貴さとは、生命の汎存性である。多くの人々は生命といふものを餘りに局在的に考へてゐる。それは概念的に構成された自我といふものを離れないからである。我が生命は、無窮の久遠の過去から、永劫の未來へと連つてゐるのである。古に或る人の形體を籍りて現れたこともある。我が後に、亦、そのやうなことがあり

得るではないか。

又、我が生命は此の世界に満ちてゐる。足もとに青々と伸びてゐる草にも、高空く翔り鳴く鳥にも、我が生命の姿を感じるではないか。勿論、かく感ずるといふことが、單に理智的の肯定ではいけない。しみじみと自覺し、而して體得することに依つて、眞に生命の貴さを感じるまでに到らなければならぬことはいふまでもないことである。

此の生命の貴さを感じる心こそ、眞實に生き、報謝に生きる尊い心である。而してひと度、魂の自由、生命の汎存といふ自覺を得たものは、此の自覺をして益々深く眞實に徹せしめるやうに心がけなければならぬ。如何となれば、動もすると、それは單なる理想的の肯定に終り易く、眞實に生きる上の力とはならないからである。

さういふことにならしめぬ爲に、益々眞實に徹せしめる心がけが必要なのである。

而して、まことに眞實に徹する心に専らであるならば、今得たる一つの觀照を基礎として、更に深い觀照を求め、益々その信念を固くするやうに進まないではゐられない筈である。

茲に金剛心の味ひが生ずる。

例へば、地におろされた一粒の種子が、土の中に根をおろし、根から根を生じて、益々深く水脈を探つて行く努力と同じやうなものである。かくて根が深くなるにつれて、幹を太く、枝葉を廣く高く伸ばして行くやうに眞實を求める人の生活は、いよいよ正しく、いよいよよい生活を開いて行くに相違ないのである。

かくの如くして、私だち人間の生命は、まことに一本の樹木の如

く自然の中から己れを立てゝゐるのである。たゞ一つの地點を守つて、其の生を終はる運命は、哀しいと見れば、まことに哀しいことには相違ない。しかし、その根を自然の中心へ喰ひ入れて、その梢を大氣の中に伸ばし、その葉を太陽の溫き光に向けて張つてをる。

何といふ喜びに満ちた姿であらう。たとひ暴風が來るとも、たとひ旱天が續かうとも、それに堪へるだけの力が、根から、幹から、枝から、葉から與へられてゐるではないか。而して光を味ひ、熱を味ふ爲には、すべて總身の感覺が生きてゐるのである。時到れば、總身が芽をふく、總身が花を開く、その生き方はこれ全的である。

又、私だち人間の生命は、まことに一もこの樹木の如く、眞實の泉、眞實の光を以て養はれてをる。それぞれに孤獨のまことに生きる其の形を淋しいと見れば、なるほど淋しいには相違ない。しかし、

此の温い太陽の愛を感謝し、此の潤へる土壤の恩を感謝して生きるといふことは、何といふ安らかさであらう。安らかであつても、決して睡つてはゐない。絶えず、生ひ立つことを忘れはしない。たゞその生ひ立ち方には些の無理がないのである。幹から枝を伸べ、枝から葉を出す、大本から脈々として末梢に及んでゐる。その生き方は全く是れ内的である。

かくの如く、全的に且つ内的に我が生命の根を張り、我生命の枝を張つて生きるといふことが、人間として眞實に生きることであり信仰に生きることであらねばならぬ。

かくして生命の木は、やがて多くの花をつけ、多くの實を結ぶであらう。而して其の實は他の人の心の中に眞實の種子を蒔き、信仰の種子を下ろすであらう。さうして、私だちの生命は、み佛の生命

に没入して、永遠に滅ぶことなく、永劫に生き得るのである。

一筋の白き道へ終

永野芳夫著

(正價金貳圓送料十二錢)

○デューワイ教育學說の研究

全壹册

永野芳夫著

(正價金貳圓送料十二錢)

○教育改造の原理

全壹册

大關増次郎譯

(正價金貳圓送料十二錢)

○カント哲學批判

全壹册

野村限畔著

(金貳圓五拾錢送料十二錢)

○ベルクソンと現代思潮

全壹册

大正拾壹年九月四日印刷
大正拾壹年九月七日發行

一筋の白き道へ

正價金壹圓五拾錢

著作者 朝日融溪

東京市神田區表神保町七番地

發行者 阪本眞三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷者 吉田松次

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場

不許複製



發行所

東京市神田區表神保町七番地
振替貯金口座東京八七貳番

大同館書店